川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十三年六月二十五日　印刷
昭和四十三年七月一日発行（毎月一日発行）
（第三十四号）

No. 34

路郎先生の思い出

七月号

世界の通が憧れる…

WHISKY DISTILLERY・SUNTORY

国際銘柄

サントリー

■インペリアル・ローヤル・オールド・角瓶
カスタム・ゴールド・ホワイト・レッド

川柳塔社主催

路郎先生三周忌句会

日時　7月7日（日）　午後1時開場

会場　光明寺　電話七七一―九二六〇番
（市電下寺町又はバス日本橋三丁目下車）

★下寺町からは南へ、日本橋三丁目からは東へ。

会費　百五十円

司会　西尾栞

開会の辞　若本多久志

★才一部　故麻生路郎先生三周忌法要（一時半から）

挨拶　桜中島生々庵

説話　加藤滝雄師

★才二部　路郎忌句会（二時から）

兼題「子」　菊沢小松園選

「机」　清水白柳選

「引越し」　北川春巣選

「人生」　麻生葭乃選

席題（三題・当日選者と題を発表。各題三句以内）

閉会の辞　川村好郎

★才三部　晩餐会（同会場で）

この会費は千円。お申し込みは二時。会場内で受けつけています。

★8月の兼題（コケシ・友情・人気・窓）

旅に出て妻に男手いたわられ

値踏みするあの眼の奥がのしかかり

智恵のない寂しがりやをさらけだし

風化した鼻っ柱俺の顔に似る

路郎先生三回忌

親のない子ら夢育つ雲の峯

中島生々庵

今月のことば

◎この7月7日は路郎先生の三回忌に当る。

◎平素雑務騒音に追いまくられている私達は雲の峯から一瞬のすき間もなく見守っていて下さる先生のお姿を見失いがちである。せめて、ご命日とか年回忌ぐらいには心静かに瞼の裏のお姿を拝みたいものである。

◎お墓詣りとかお祭りとかといった形式に捕われなくてもという理窟もあり得る。然しそれはあくまでも理窟であって、たとえば月々の命日に母の墓前にぬかずいたり、回忌に祖先の法要を営んでみたりすると亡き人と私達との間に理窟ぬきでほのぼのとした心が湧いて来る。その瞬間の心こそ寔に尊いものである。吉井勇の歌を思い出す。「おん墓の石を撫で居り幼くて抱かれし父の腕思ひて」

◎川柳句会を持ち、済んだら皆で盃を酌みあって雑談もよかろう。先生は一人であの童顔をほころばかしていられるであろう。それでいいのである。先生の盆踊りの句「踊りの輪月ははるかに忘れられ」をそのままに。

川柳塔七月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)
川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)
「晴れ男」路郎先生……北川春巣…(2)
近詠……麻生葭乃…(19)
川傍柳初篇研究…(六十一)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫
川柳明治百年……清水白柳…(37)
路郎先生の思い出……三条東洋樹…(22)
父を想う……西村梨里…(24)
路郎先生の初心時代……清水白柳…(26)

私論・柳論

「晴れ男」路郎先生

第三回路郎忌がめぐって来た。

路郎先生は三年前の七月七日になくなられたのだが、今年の路郎忌は奇しくともいおうか丁度日曜日に当るので、川雑にゆかりのある者が、午後一時、大阪下寺町光明寺に会して法要を営み、その後で句会を催すことになったのである。

思い起こせば去る昭和二十九年七月十日、先生のご誕生日に、先生の川柳生活五十年をお祝いする行事の一環として「川柳まつり」が行なわれ、三十八年まで十回に及んだ。第一回は当日が土曜だったので夕方の句会、翌年第二回は日曜だったので昼の句会であった第三回からは、必ずしも七月十日に拘泥せず、その前後の日曜日を選んで昼に行なうという慣わしとなった。

それについて興味ある事実があるので、ご紹介しよう。それは先生が「晴れ男」であられた事実で

秀句鑑賞……後藤梅志…(38)
雅号ぶっちゃけばなし……隠岐不醉…(53)
利久は利休が正しい……富士野鞍馬…(59)
自選百句……菊沢小松園…(40)
……不二田一三夫…(42)
……川村好郎…(44)
近作柳樽……若本多久志選…(28)
川柳の目の適確さ……馬場博治…(59)
初歩教室……菊沢小松園…(48)
大萬川柳「貞操」……清水白柳選…(52)
★柳界展望……(薫風)…(54)
★本社六月句会……(庸佑)…(56)
★各地柳壇……(文秋)…(60)
「七夕」……安平次弘道選…(50)
一路集「別居」……小谷仙山選…(50)
「ライター」……吉原紅月選…(51)
★編集後記……(白柳・一三夫)…(65)

ある。この「川柳まつり」の日が雨だったことは、十回のうちにただの一回だけで、他の九回は、たとえ朝は雨でも午後は晴れだったという統計があるのである。

気候学のことばに「特異日」というのがある。例えば十一月三日の文化の日（元の明治節）には雨が降らぬというような特異の日である。ある人の統計によれば、八十年間にこの日が雨だったのは、ただの十三回だった由である。これを特異日と認めるならば、十回に一回の雨は特異といえるだろう。しかもこれは七月十日に限らず、その前後の句会の日なのだから、先生が「晴れ男」をもって自任しておられたのも尤もといえるだろう。私のお供をした旅行や吟行でも、雨だった記憶は一度もないのだ。先生のお葬式の日も、心配していたが、雨後晴であった。

私の知らない先生の雨の旅は、信州へ行かれた時であろう。そしてその時は

遠く来て信濃に山のない日なり

という名句を残しておられる。

（北川春巣）

川柳塔

中島生々庵選

大阪市　山川阿茶

春の陽を鶏トラックの籠の中
一輪の椿も家元らしう活け
按配ようぬけてて人に親しまれ
ばばぬきに出来ない理由は共稼ぎ
出稼ぎの母ちゃん酒の味おぼえ

青森市　工藤甲吉

明治百年女の膝に陽があたり
農婦症瑞穂の国は哀しかり
文化財などとも言われヘソまがり
天の目がちゃんと見ていた逮捕状
一列にこちらを恨むメザシの目

岸和田市　内藤きさ子

新茶出たことも知らずに病んでいる
来たこともない路次昼の灯がともり
それぞれに行くとこがあり春深む
有難くない親切がまだつづき
手離した山の緑が美しい

大阪市　正本水客

母との暮しをおんな自分の城にする
身についていない言葉で子を叱る
たまたまの早起き雀がきてくれる
わかめ採る手先を波が初夏にする
竹の青もえ五月雨の道つきる

室戸市　奴田原紅雨

職を持つ妻の言葉がよう響き
尼にした男閻魔に叱られる
糸柳川面をなでる明治篇

俺の顔見ていた猫が欠伸する
ふるさとを捨てふるさとの詩をつづり

出雲市　尼　緑之助

宍道湖の夕陽本日風がなし
ミレーの祈り干拓地が暮れる
似た者が夫婦と二人でけなすなり

大森銀山にて

新緑に埋まり銀山睡眠中
千姿万態物申したき羅漢像

岡山県　浜田久米雄

おしゃべりはここでもおなじ事を言い
皮切りは丸に十の字の手をたたき
孫に酌させてなみなみ酌がせとき
父と子と孫とにつづく誕生日
日本のなかでつばめに選ばれる

大阪市　本多柳志

縦のもの横にして見る日の機嫌
貞女の看板外して見たい日もあらん
表彰をされて社宅の住みにくし
わがものを貰う印鑑証明書
六法をかじって妥協成り立たず

倉敷市　本田恵二朗

気にかかるくせ放任の顔作る
日記帳みたいな新婚だより来る
琴線に触れあう酒に雨も佳し
再婚の披露胡座に取り巻かれ

賀陽邦寿氏と歓談

元宮を岡山弁でほほ笑ませ

大阪市　橘高薫風

尾道にて（四句）

尾道や今見下ろせし船に乗る
五月の雨　尾道生駒似たるあり
師を胸に置く船と船すれ違い
盲目の亜鈍氏が笑む師を話し

鞆の浦にて

鯛の紅仙酔島の緑濃し

高槻市　傍島静馬

へんくつと知らず赤ン坊笑うて見せ
くどくどと云うから云いわけめいてくる
腕自慢捨てた職場を夢に見る
出直しへ奮起を説いて貸しもせず
ペコペコと呉れた名刺はすぐ忘れ
ネオンにも似て都会人の昼と夜

大阪市　不二田一三夫

あやつり人形の反抗　糸をもつれさせ
丸噛じりしてみろ　リンゴのふてぶてし

寄席（二句）

寄席演芸一と山なんぼでならべられ
キャリアだけでは放送してくれず

諫早市　川岡霊眼子

恵まれてもう拝みには来ない風
蒸発が戻り両親負けて居る
辛抱してる間に流行に追い抜かれ

飲友達諫早市長に独走当選

幸運はこれ見よがしの道を行く

大阪市　大坂形水

企画部へ社長の体験邪魔になり
ちょっぴりと虚栄ごころで買う群像
手術終えし医師の姿が大きく見え
粥一つ喰べて看護をホッとさせ

大阪市　金井文秋

紋付はあるのに借りるモーニング
よたよたと泳ぐ金魚が愛される
長生きが孫の苦労になってくる
ほめられていやな予感のする日なり

大阪市　福井野迷路

ほどほどにしときなはれと人の事
人間の国宝西日のかがやき
場違いの見目うるわしく生れすぎ
われ人の落目よろこぶことなきや

大阪市　西出一栄

コンクリートの割れ目からもおらが春
許るされた散歩へまぶし藤ひらど
孫達が見舞の品を見舞いに来
うたて世のリズムに遠く貝でよし

青森県　木村涼人

肝臓にまだ飲む気かとどやされる
災害をのがれて笑う事があり
震度五に汚職の匂いして崩れ
五月雨は無情余震がまだ去らず

高槻市　若柳潮花

もみくちゃにされても花の春を着て
襟あしへ浮気すすめる宵の風
縁日を抜ける女の螢籠
気に染まぬ人と知ってて化粧する

豊中市　戸田古方

古本屋が休みでただのまわり道
分析をするまでもなし性は善

神風が元寇通り吹かいでも
颯爽と歩いて君はあたり前

大阪市　早川清生

神輿の先頭に社会党員である
宇宙人に子を生ますのは米かソか
こんな本に金出すやつで書店こみ
恋の自由信じて中学出の女工

大阪市　後藤梅志

小刻みにゆこう今年を生きるだけ
はればれと福祉年金うけに行き
ものを捨てささんのも根性の一つ

孫　香川大学入学

実力じゃないのが運をとり戻し

岡山市　服部十九平

異議なし異議なし不満な顔で言い
拝む真似猿はみかんをまた貰い
公害の煙にさえもある詩情
晩酌で晴らせる心配たかが知れ

松江市　中川晃男

古戦場ダンプの下に組み敷かれ
由来など聞きたくもないガムを噛み
所詮はこうなる人生の廻り道

良心に誓って法廷嘘もつき

神戸市　仲どんたく

連休の雨慈雨とする空財布
ホステスの夢大学に子が通い
モーニング仕舞う閑無き職につき
あれが父あれが母らしおっとせい

門真市　福島鉄児

糖尿病再発

永生きはしとない煩わしい暮し
糖尿と知らず見舞を提げてくる
お見舞は家族のものが食うただけ
桜餅ああなつかしき色彩よ

小松市　関戸宗太郎

社長より頭がきれる不幸せ
宗教の押し売りが来るほど落目
観光バス信者は信者らしく降り
煙吐く汽車が素朴な町にする

京都市　都倉求女

熔岩の怪奇さ埋没の怒りなる
波砕く音へ灯影がとどきかね
カーブどう切っても海にある青さ
新婚のバスに七時間ちぢこまり

小松市　馬場魚山

伝統に生きて後継者が居らず
年輪をきざんで生きた文化財
両側に停めて歩行に無理な街
坊さんがバイクでたもとふくらませ

熊本市　楠田英子

恋の歌まわらぬ口で声をはり
燃えるものほしく句想に浸りたき
青葉若葉家にいるのが惜しくなり
総入歯孫がほしがるのもおかし

笠岡市　松本忠三

参考までに聞いておこうと無責任
生返事して女房が爪を切り
直立の姿勢で左遷の辞令受け
日給の身がこれしきの風邪位い

倉敷市　小幡里風

太陽の死角で何をたくらむか
この怒り癒そう大樹ゆさぶって
合鍵を持たすあいつの主義に惚れ
親展の封書で俎上にのせられる

美祢市　安平次弘道

過去の地位捨てれば仕事たんとあり
神のみぞ知るでは裁判に勝てず
ショックから三月予備校にもなじみ
金の世に奉仕をすれば疑ぐられ

兵庫県　遠山可住

酒飲みをあしらう術も秘書の腕
七人の敵の最後に妻が待ち
ついたてが隣りの席を遠くする
残るのが残って銚子からになる

新居浜市　小林孝正

五分後に逢えるコンパクトを覗き
二十年無駄足となる社が潰ぶれ
肩書にお辞儀されてるとも知らず
我が道を行くに肩書邪魔になり

新居浜市　安藤桂仙

満ち足りた事にして置く母の前
子の面子おもうて就けない職があり
王手飛車ねらうやからの汚職ざた
初耳と言うて真相確かめる

岸和田市　葛城伊三郎

赤紙で値段を附ければ人が寄り
苦労して掛けた満期の貨幣価値
入園式月賦の着物も交ってる

窓開けりゃ片方が閉める裏同士

大阪市　吉岡美芳

後輩の結婚式に招かれて
寿をせめて大きく書くとする
寝に帰るだけのわが家が城である
メーデーの警備の俺も労働者
理由なき理由蒸発した理由

大阪市　室谷鉄舟

模範亭主二次会まではついて来る
感情をむき出し何が愛の鞭
気前よく付き合い家は火の車
文化とはトイレの故障もて余し

香川県　三井酔夢

短日を燃えて牡丹のエゴイスト
緋牡丹は炎の女かも知れぬ
みれん断つ髪切って来てまだ恋し
針の山歩くであろう嘘を積む

東大阪市　久米奈良子

結論を急げば悩み深まりし
苺つぶす五月の夜のメランコリー
ある時は劇中劇のその端役
あんぐりと口をあずけた治療椅子

富田林市　川端東雲楼

つかみどこない答弁は年期入り
男性の無口の奥に秘めるもの
几帳面な父にそろそろ物忘れ
屈辱を男雅量でうけとめる

守口市　村田瓢太

連休がすめば疲れてまた休み
粗品貰うだけをデパートへ廻り道
うれしい日目ざましよりも先に起き
舌打ちをしても上司の命は命

鳥取市　藤本礎山

倒産を救う見合いとつゆ知らず
ほろ酔いの妻に色気をふと見つけ
ミニばやりロングが間抜けたように見え
忘れたい悲しみ同情が来て哭かせ

熊本県　有働芳仙

子供の日迷い子へ親が呼び出され
水上げの悪い東大出を雇い
おしぼりを真黒にする客で混み
妻と出た日は素うどんで済ましとき

枚方市　宮川珠笑

トロフィへいじめ抜かれた顔の馬

当選はいつも演説とちる人
うとまれて便利がられて母の老け
薄給の愚痴へ課長も仲間入り

竹原市　山内静水

噂まき散らすおんなのいい度胸
陽の匂いざぶとんふくれるだけふくれ
許す気になって条件などいらず
子に見せぬ程度のケンカもして平和

大阪市　児島与呂志

長女のことども（三句）

馬鹿らしい筈の娘の浴衣選る
給料日キッチリ前貸し分は取り
ハイヒール疲れ気にせぬ若さあり
朝顔のつるの自然を人が変え

京都市　松川杜的

滝坂・柳生街道

雨の夜は如何におわすか野の仏

首切地蔵

首のない地蔵へ落葉ひっかかる

円成寺

光背がかもす歴史のシルエット
三脚を構えて石仏の呼吸を読む

笠岡市　木山要次

身動きがならずばしないだけのこと
イメージが逢えば崩れるかも知れず
雑草でないぞと刺した鬼あざみ
ままごとの馳走が野辺にまっ盛り

倉敷市　川端柳子

イミテーション宝石箱で背伸びする
聞き役にまわって人のよい笑顔
鉛筆をなめた家計簿遺書となり
死に時と云うは他人の親の事

倉敷市　水粉千翁

貸し借りの積り積った仲の良さ
母の日へ父晩酌の空元気

桂浜にて

渚から太平洋の桂浜
黒潮と勝負ふところ手の龍馬

倉敷市　井上旭峯

隙のない答弁さすがと首ひねる
連結の貨車を数える峠の子
寡婦ある日何思うたか薄く塗り
旅の凝りほぐしてくれる胡瓜もみ

倉敷市　野田素身郎

メーデーへ明日定年の身で参加
ライバルとも今日はメーデー腕を組み
ベルトまでゆるめて義父が食べてくれ
遅刻しても女気にいるまでは塗り

芦屋市　丸川初甫

崩える色箪笥の底に妻は老い
つき合いへ個性を殺す年となり

新歌舞伎座「春爛漫」中村米吉

襲名は春の鼓でお目見得し

新歌舞伎座「反逆児」中村錦之助

切腹のラストシーンにある若さ

愛媛県　渡辺暁童

来て飲まぬほどに旧友栄達し
盗作をされる位いの句がほしい
三年もたつと大工の女房也
意気地のなさを清貧という

豊中市　寺田花宵

花のためばかりと言えぬ水をやり
蝶ひとつ二階の窓の花に来る
ひとり来てふたりで歩くものと知り
アベックを縫うて迷い子泣いてゆく

大阪市　木村水洞

勤続三十年中央表彰に妻と上京三泊四日
銀座八丁労わり合って捗どらず

東京プリンスホテルの式典風景

大臣に内助の功をねぎらわれ

天皇陛下より賜謁とお言葉を賜わる

お言葉にすこしふるえるモーニング
東京もよいが我が家は更によく

桜井市　岩本雀踊子

良く云えば男勝りと云う女
道しるべ大和は寺につきあたり
血圧があるから腹も立てられず
苦労してるのに中年と云う太り

今治市　越智一水

御見舞へ職場の愚痴も言うて去り
だん畠芋がころげて貧が追う
にわとりのエサを雀が食べに来る
産院に生命を守る灯がともり

堺市　高橋千万子

通り魔に一理あるよな夏姿
並木道もっとつづいてほしい仲
不精者明日のデイトにね押する
夜店で漁った花を並べて庭が出来

ハワイ　上田紅溪

ベトナムの蠅より頭の蠅を追え
楽園の椿はつぼみのままで落ち
捨てた猫子猫くわえて帰って来

下関市　中村九呂平

この宿も飯の固さを妻と愚ち
十円の付落ちもない妻と旅
ポーズ仕ようにこまるほど妻が撮り

下関市　国弘半休

俺のくせ直せば僕でなくなるさ

旅と川柳

研修に出かけ公金まで使い
朔の旅お稲荷様へ寄って往く

岡山県　直原七面山

海月のように生きて九十二
働き者の妻へ手袋
鍵っ児を夕陽が染めて団地暮る

倉敷市　木村千容

あわただし歌にも詩にもならぬ春
春秋の自然のなかに生きる幸
断層は生きのびるほど深まりて

鳥取市　河村日満

酔えば寝る癖先輩も母もほめ
善人がふるえあがった単車事故
恋人かそうかと許した訳でなし

京都府　大鶴喜由

あの女いなけりゃムキになるまいに
成績は下だが貴重な行動脈
茶摘機が出来て娘も唄もなし

島根県　藤井明朗

重障児施設の中に嬉々として
新鮮なファイトを包む新入社
向い風くるりと和服つまさばき

名古屋市　吉田水車

背水の陣空らっぽの財布
つつじ咲くひょいと意見の合う日なり
女優さんと写る犬までとるポーズ

藤井寺市　西いわを

燃え尽す迄は自然にまかしとき
銅像の鳩は雀と見違われ
神苑は白　紫の花あやめ

松江市　岡崎祥月

不甲斐ないと思いどうにもならぬこと
夫婦円満一寸けんくわがして見たい

遠廻りした人生も俺の運

姫路市　隠岐不酔

彼等にも的があるだろ蟻の列
座布団もお茶も出さずに妻の留守
出し雑魚になろう覚悟で受ける役

伊丹市　小川静観堂

貧乏を知らぬ長屋の鼻ッ垂れ
いち度みて死にたい銀座八丁目

大石順教尼急逝

腕塚で復元成りて仏の座

大阪市　今西章雅

櫃原神宮

玉砂利へ駐車時間が短かすぎ
ハンカチをパーマに境内春霞む

談山神社

散る花へ空澄み十三重塔婆

下関市　桜川不水

御大事にと言えば病人コクリとし
心得て二度うなずいた女将の目
世の中がひらけ地蔵さん疎開され

笠岡市　木山遠二

経験と思う不運が重ねて来
おれもあんなのかとおない年を見る
何を切るつもりか出刃を研いで居り

岡山県　田村藤波

白足袋は踏まれる覚悟予備を持ち
孫が在り娘が在り東京遠くなし
三面の今朝も身振いつくニュース

岡山県　大森娯句楽

就職のスタートへ鳴る発車ベル
嫁と姑の歯車逆に廻う時代
思いきり伸びろと新茶の芽に小雨

愛媛県　村上旭童

山鳩がないて五月の山の朝
歩道橋よいしょよいしょと登りけり
虫眼鏡かすれたままの字が浮び

倉吉市　奥谷弘朗

自分でもオッチョコチョイを認めだし
しみじみと振り向いて見る一人旅
横顔も一億となる物価高

呉市　林野甦光

弱点が条件うのみさせる破目
人ごみの一人がモデル権主張
無視されるよりけいべつされる欲

米子市　石坂新雪

豆炭が消えた火鉢でほっとかれ
熱帯魚つくだ煮になるともなし
俺の眼に余る老女の赤い紅

岡山県　池田古心

喰べ残し集めてママの食終る
風邪で来て風邪のお医者に診て貰い
貴男の子産んでみたいと謎をかけ

大阪市　中川滋雀

食てチョンの生活へバンド締め直し
タレントの涙目薬とは見えず
落款を入れて見直す目が細い

鳥取県　清水一保

日本は狭いと跳ねる鯉のぼり
車窓より見る農村で美しい
吉報に庭のつつじの色もさえ

堺市　新谷笑痴

反省が仕事の鬼となる若さ
ぼろくそに言われたことを大事がり
月見草凋むて帰路につく勤め

大阪市　天正千梢

自を責める外なし苦難続く日日
前向きに生きて人世不信に出合う
遅々とした歩速で万葉の肌さわる

高石市　谷沢好祐

半数は男だ攻めよと化粧品
ゴロ寝する権利奪られて遊園地
鉢巻の列が行くなと鯉幟

鳥取県　森田布堂

連休を恨み墓前に寡婦ひとり
相性の背丈はこうも違いすぎ
謹告のチラシ必ず値上げです

富田林市　岩田みよ

我を通し空の青さへ聞いて見る
笑えない漫画と見てる恐妻家
笹の根に抱かれて山百合まだつぼみ

倉敷市　松下梁水

貧しさを温め合うた夜のとばり
老妻の主張日記の中で生き
晩酌の前借り妻を苦笑させ

宇部市　平田実男

つんとする女の方へ隙があり
裏切らねばならぬ指切りの重い指
ウインクを妻が気付かぬように受け

兵庫県　大江秋月

ローカル線とめて台風北へ抜け
エプロンのポケット五円貨一円貨
貨車一両ひいてローカル淋しそう

奈良市　宮口笛生

あっさりとした雨でした鯉のぼり
初物のナスを都会で食べて来る
素人の奇術は種もあかされる

堺市　青野遊仙

五人目で安物になる孫の品
背伸びする話しの顔は落着かず
公報車聞かせともないよう走り

兵庫県　河原みのる

ストレスに堪えた入れ歯が今朝きしみ
腰で歌うおもてたら肩でもうたい
銀婚のまだ実家ごころもちあわせ

高槻市　山田季賛

ベテランに意見ゆずってホットする
桜餅春のコタツでお茶すする
水虫がぽつぽつ動く水ぬるむ

玉野市　小谷仙山

木の枝がみんな弾んで居る若葉
糸くずを肩にかついだ一人者
朝刊が夕刊抱いて来る田舎

和歌山市　西尾公作

社長訓長くてさめた汁を吸い
黙否権つかって女房覚悟あり
覚悟して話す社長にとぼけられ

出雲市　原独仙

床置きも春を漫歩がしたかろう
酒　たばこ　四月の嘘でなく値上げ
高給に未練があって嫁きおくれ

大阪市　宮尾あいき

師の名句あやめを活けて共に賞で
母の日をフルに生かして一人旅
石仏の新緑越しにおわします

大阪市　川口弘生

死んだのが出て同窓会急にやり
貧乏は孝子が出ると励まされ
釣れずともよい浮標だけどひいてくれ

香川県　岡田拳法

背広着て汚職横領するお化け
悪いことばかりでないさ顔を上げ
結構なお話ですがとうっちゃられ

竹原市　小島蘭幸

女って駄目ねと女　甘えてる
しゃべるだけしゃべらせといてからしゃべり
サングラス弱い男によく似合い

大阪市　磾弓彦

直球もカーブも変らぬ草野球
七三に折れて成立さす弱身
ひょっこりと手ぶらで帰って来た無言

大阪市　西川誓二

山里の煙草店にも赤電話
雲行きが怪しくなった父と母
臨月を気にして母から娘を訪ね

泉佐野市　大工睦夫

父さんのオシャレはよれよれの替ズボン
行楽の土産は亭主にぶら下がり
記念撮影引ずり込まれて買わされて

岡山県　横山一声

赤札も赤札なりに値があがり
三十と言えば出戻りかと聞かれ
共稼ぎ煙草もビールも共に飲み

ホノルル　加川カロ

知っててもそ知らぬ振りで姑好かれ
引退をすれば損役つきまわり
曼珠沙華異土になじまず花咲かず

奈良市　村上春巳

ちっぽけな恩に季節の便り来る
マイカーの苦労を想う観光地
藤棚を写すカメラへ巫を借り

大阪市　河井庸佑

これくらいわからんかいなと親の欲
言いたいこと言えと言わせてチェックする
ほめられる子叱られる子がある七十点

平田市　久家代仕男

斬罪の女囚にも似て落ち椿
値切るだけ値切りパチンコ屋ですられ
呼びものの仮装我が子に先ず呆れ

豊中市　米虫一乃字

税務署を出て鼻唄がヒョイと出る
船酔いをかくす虚勢のガムをかむ
私服着て立てば娘ももう二十才

宝塚市　小畠無聖

小さな頭一つ下げたら妥協でき
今一度逢いたいひとの喪の知らせ
みぐるみを脱いで如来に還る風呂

奈良県　草深酔升

同県の出と知ってから馬が合い

市バス所感

釣貰う料金箱のあじけなさ
空くじは無しにつられて買いはずみ

和歌山市　垂井葵水

割箸を割らぬ酒豪と隣りけり
骨つきの目方と笑うスマートさ
大広間浴衣の首が違うだけ

泉大津市　高津徹也

天下泰平確かなる子の寝息
スリッパも二足二人の新家庭

松江市　小林孤呂二

底辺もわすれ夜桜の仲間に居
公園を汚して恋は去りにけり

加賀市　細呂木魯木

禁漁区の魚になりたい今の俺
紫煙充満窓明ける者もない面白さ

八代市　永松道雄

眠りから醒めて緑りの陽に当り
子沢山陽と陰とに児が育ち

和歌山市　土谷城石

判ついて医者に身体を任し切る
亀遊ぶ堀へ逆立つ天守閣

大阪市　宮地双楽

どじ踏めば踏むほどあせる初舞台
選ぶにも選びようなし雑魚もろこ

守口市　羽原静歩

尻餅をついて定年ふりかえり
バランスもとれずもやしの子に育ち

西宮市　島居百酒

嫁ぎおくれまた免状が一つ増え
芸者らしい妓も労組の同志とか

大阪市　賀本昇

演出の涙と知らず金を貸し
田を売って御殿のような家に住み

松江市　柳楽鶴丸

考えて見ればやっぱり僕の負け
口だけは本当に調子のいい女房

鹿児島市　土岐トク子

病める身にとどく真赤なカーネーション
母の日におどけて捧ぐ子の太し

京都府　清水谷句楽坊

御仏の精舎に有財餓鬼が住み

末寺衆のかすりで門主緋の法衣

加賀市　竹浪浪寿

釣れそうにないのに一人糸をたれ
別れ来て鏡のぞきぬ恋の宵

★

清水白柳

鳩雀人が来るから寺に居る
生花の麦は不幸なかげを持つ
おおそうかチラホラ国旗立つ日なり
万葉の言葉で口説く面白さ
外はみな河内弁なり風薫る

川村好郎

東北弁に道を訊かれた京の春
大掃除すんでカーテン初夏にする
もめるわけ仲裁感心して帰り
改札を出る間も腕を組みたがり
生きるため着飾る女脱ぐ女

西尾栞

平均寿命四十年も余し娘逝く
臨終を告げる主治医の瞳の険し
臨終へこっちの心臓もとまりそう
肉親の鳴咽の中の釘の音
又しても逝った娘の話宵の雨

北川春巣

夕刊のない日大事故起きたがり
水虫の手当もしてる社長室
鉄筋三階風鈴の吊り所
孫が泊って若い祖母疲れ切り

酒　煙草値上ゲ

買溜めという語が突如よみがえり

若本多久志

飲まされた飲ましてやった嘘とうそ
昭和元禄男嫌いという不思議
七十路の眼に世の中が曲っとり
み仏はえくぼのままで何万年
武者人形父親だけの礼を聞き

菊沢小松園

幸せなかたちのままを冷凍魚
連まいて女特価へ引き返えし
諦めて居るを悟りと見た凡愚
神様をおそれ夫の眼をおそれ
女王蜂人目のわりに小心な

黄檗山村瀬玄妙老師上梓

画信三十年

阪大医学部助教授市原硬博士へ直原玉青画伯が送った画信三十年の画や文が美術印刷によって完成された。

近詠

大阪市　**橘本緑雨**

咳をはずませて残業とぼしい灯
朽ちている土塀にかたくなな家風みせ
石ブーム値切りそこねて重くさげ

軒の雀敷居まで越して来る
母より大きく育ち別に歩く

大洲市　**米沢暁明**

形勢は混沌隅が劫で生き
鯉のぼり立て日の丸は立てぬ家
それからの村の歴史をダムが替え

須坂市　**高峰柳児**

もみ消しの汚職下ッ端から洩れる

今治市　**長野文庫**

ベラ棒な地価へ煤けた庭の松
訳知らぬ人に不思議な依願免
また殺すのに性こりもなく金魚
代書屋の智恵で始末書低姿勢
冬眠が五月にさめる冷蔵庫

今治市　**月原宵明**

山門へホテルの看板あげかねる

五月雨へ未練がましく散るつつじ
蝶々はあやめの花を素通りし
凡人の幸せ丸い膳囲む

和歌山市　**秋月宏方**

一応は平和に見ゆる団地の灯
汚職するほどの地位には遠いパパ
あくびなどもうしておれず退社ベル

名古屋市　**長谷川鮮山**

ニュース解説和平への道まだ遠い
日向葵の陽へ楯ついている姿
復唱をもう一度して切る電話

近詠

奈良バスのおなりはごめん杉木立
藤づるが蛇体とみゆる山深く
新緑へ咲くはあせびか　こな雪か
平社員妻新築の坪狙う
古蹟発掘又遊ばせる土地がふえ

孫は可愛くても、孫の句は作らぬ事にしている。孫の句を作っていると、何だか冥土から録音しているような気がして淋しくなる。篠山の小西無鬼さんの句に**孫はよしいつ死ぬのんと問われても**と云うのがある。この句は不思議にも、老人の老いぼれた面が帳消しにされている。ただ子供の無邪気さとお互いの愛情がミックスされたフルーツカクテルのような句である。

・乃葭生麻・

川傍柳初篇研究（六十一）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

493　善光寺辺かと明キ徳利を遣り　五英

高須＝酒屋の徳利拾いに信濃者を使った。「大切な研究句」と柳雨翁は云っている（信濃者は米つきときまっているという見方で）が、この句は母袋未知庵の「川柳信濃国」にも出ており、それによると大食漢として、信濃者と米つきは並び称されたが、職種はいろいろあったらしく、左の通りいろいろ挙げている。

飯たきの自慢は国の月と蕎麦　俳諧ケイ・23
切れた三ン持たせ信濃買いにやり　三二・23
先刻の間違ひ信濃者と詫び　榜二・34
去年来た信濃で道の世話がなし　榜三・28
信濃から来い〳〵大根洗う也　一六・24
薪車信濃をまぜて引いて出る　一六・28
連れないにゃ劣ると信濃供に連れ　一八・25
剽軽な信濃は獅子の足に住み　安元松・4

これを見ると、主に町家に雇われた半季者で、雑用に使われたのではあるまいか？

前田＝わからない。

岡崎＝酒屋に奉公して空徳利を集めている信濃者に、信濃と云えば善光寺くらいしか知らない主人（？）が、信州だそうだが、善光寺様の近くかなど聞いているのである。

清＝岡崎説賛。川柳には信濃を詠んだ句は多いが、当時の江戸の人間は、ほとんど信濃については知らなかったであろう。従って信濃者に対する質問も主題句ぐらいのところが精一杯。

藤井＝同。高須氏の信濃者の職種について親切な解感謝。二百年以上も昔のこと、信州と云えば善光寺様としか一般の人には知られていないのも無理なかったろう。

川端＝御用聞きに空になった徳利を渡しながら（酒の註文）出身地を聞いているのではなかろうか。樽拾いはあるが徳利拾いをしたものかどうか手元の資料では見つからなかった。錫徳利の争奪とも解せない。

丸＝川端説賛。樽拾いは空樽だけでなく、空徳利も集めて歩いた。

岡田＝礎稿にあるように、樽拾いに信州出身もいたものかと飯島花月翁などもひどく珍らしがり嬉しがったが、これはちょうど御用聞きの小僧がいなくて、季節労働者のシナノを臨時に、ちょっとのあいだ御用聞きにさせたのだと思う。

494　しんどやと休む茶代は五六文　門柳

高須＝茶見世に休んだ上方者が、茶代を定めの五六文より出さぬといった句で、上の句で上方者を現わした巧い句である。大体が、ちょっとした疲れ休めの茶店が、美しい茶汲み女を置いたことから、いつしか色

っぽい店となり、
裏表ある水茶店ははやるなり　二一ス・10
休んだり茶を飲んだりは、ほんの外面営業となってしまった。この句はそれを知らずほんとうに疲れて茶屋に休んだ観光客を詠んだものである。
水茶屋にぶらついている大だわけ宮一・7
水茶屋へ来ては輪を吹き日をくらし初・4
岡崎＝賛。上方者でも、伊勢者だろう。
清＝賛。腹にいちもつあれば百文も握らすところだが、ただ休むだけであるため茶代も五六文。
藤井＝賛。江戸っ子の上方ベッ視の句。
丸＝賛。上方者は勘定高いけちんぼだと江戸っ子はきめこんでいた。
岡田＝茶代は五六文が相場。もちろん決まっていたわけではないのだが、五文が常識とされていた。したがって十文おこうが八文おこうが一向に差しつかえはない。「五六文」としたのは句調の上からである。

495　弁をふるって白練を巻上る　　眠狐

高須＝吉原の大紋日八朔の白小袖を着るためには、吉原のオイラン衆はみな大弁舌をふるって、その白練を買う資金を集めねばならなかった。
八朔に黒助でいるつらい事　二三・16
八朔は今に女郎の半病気　笞二・31

496　本田あたまで今あきる四書をよみ　　秋紅

丸・岡田＝賛。
高須＝既出「ちうとうにして四書などを売り払い」の少し前、もう頭は本田（当時通人に喜ばれた流行の男髷）にしたが、とにかくまだ四書は読んでいる。やがてその四書も売り払われることは、そのマゲを見ても判ろうというわけである。
素見物本田に結うは何事ぞ　六・12
前田＝賛。主題句はもちろんどら息子。「今あきる」はうまい。
藤井＝入学または進学期に参考書代と称して多額の金を請求して下駄をはく現在と同じ。親父も昔同様だったから文句も云えないはず。
丸・岡田＝賛。

497　吸付て傾城肩の方へ出し　　眠狐

高須＝女郎の吸い付け煙草（もちろん朱羅字の長煙管）「三枚重ねの布団に腹這いに寝ていて受け取る客の得意思うべし」と柳雨翁いう。「吸付て出せば夜具から口を出し」で、この間接接吻大いに喜ばれたものである。
吸付てあったら内儀拭いて出し　三・15
で、それを拭いて出されては、うれしくないのである。
前田＝賛。お色気たっぷりの佳作。
清＝「肩の方へ出し」だから後からしなだれかかるようにしてであろう。
藤井＝色っぽい句。肩の方へ出しだから、やはり客は既に横になって寝ているのに女郎がゆるゆると立膝で吸付煙草を後から肩越しにの方が一幅の画になると思うが。
丸＝片膝立てて吸付けたばこを、ゆったりと肩越しに客にすすめるおいらんのもったいぶった様子。
岡田＝諸説に尽きる。

498　餅屋の向ふのが榎の僧正　　門柳

高須＝既出「榎茸はえたに異名もう付けず」の榎の僧正の僧房の向うが餅屋だという句で、浅草餅の店を詠んだだけのつまらぬ句。
丸＝賛。但し榎の僧正は徒然草の良寛僧正から、伝法院の僧を擬したもの。
岡田＝賛。

若本多久志川柳句集
老いの坂
実費四五〇円送料七〇円

麻生路郎先生（左）と橋本緑雨氏と高橋かほる氏
（兼六公園・昭和7年4月17日）

路郎先生の思い出

三条東洋樹

さくら百句作らぬうちにさくら散る　東洋樹

毎年こうした悔いを心に残して春を見送ると、空はもう初夏の光に輝く。光陰矢の如しと云う古人の言葉が痛切に身に響く。やがてこの空にも雲の峰が現れるのも間近い。そう云えば路郎先生逝かれて早や三年、今年もやがて三回忌が巡って来る。

つい四五日前の暁方、私は路郎先生の夢を見た。直接の師弟でもない私が、何故路郎先生の夢を見たのか、この心理は解らないが、眼が覚めてから朝まで、私は路郎先生の事をあれこれと思い続けた。

路郎先生が川柳雑誌を創刊された頃、鳴尾のお宅で毎月作品の批評を仕合う月評会が開かれて居て、神戸からは紋太さんがよく出席されたが、私も紋太さんに連れられて一、二度お邪魔した事があるし、昭和十三年頃私が「覆面」と云う雑誌を出した時は、その創立句会に路郎先生は出席して下さった事がある位だから、私の川柳生活の第一期時代からの御縁であり、従って路郎先生の翁は、川柳家としての私の成長に大きな影響を与えていた事は無視出来ない。若しも私が大阪に住んでいたか、若しくは成長過程の神戸柳界という適当な培養土が無かったら、私は路郎門下の古参株で納まっていたかも知れない。いや、直接の師弟ではなくとも、私の心の中には、師と仰ぐにふさわしい先生のイメージがいつまでも生きている。

不可解なこと

今考えても解らぬことが一つある。ありがたすぎて先生の真意が未だに摑めないこと。

昭和の初期、私がまだ独身時代で、ふあうすとも未だ創刊されなかった頃、病弱だった私は、あまり珍しい事ではないが暫く臥床した事がある。ある日思いがけなく葭乃夫人が訪ねて来られて「路郎が一度お訪ねして来いと云いましたので……」と、見舞の菓子箱を置いて帰られた事がある。単なる川雑の一読者に過ぎぬ私に、このような温い気持で接して下さる先生。やはり何かの絆が二人の気持の上に生れていたのであろうか。

川雑とふあうすとは、昭和七年神戸支部の問題から端を発して（爆弾事件とも云う）、長らく両社の交際は絶えていたのであるが、支那事変の頃、ある日の夕方、突然路郎先生が旅の帰途とかで会社へ訪ねて来られた。全く思いがけない神戸訪問である。

「朝の出勤のおそい人は、夜もおそくまで会社に居るだろうと思った僕のカンが当ったネ」

そう云ってお供の柳人を顧みてカラカラと笑われた先生を御案内して、久しぶりに御高説を承った。

その頃すでに先生の胸中には、川柳雑誌社

の未来図を描く苦労があったようだ。私に語られた話の中にも、先生がバトンを渡すべき人材の育成に苦心して居られる様子が、ありありと感じられた。

「君が来てくれるといいのだがなア」

ちょっと水を向けられてから、

「然し僕は誰が来ても後継者には二、三年は厳しく仕込むよ」

と断乎と云われた。

若い、将来性のある人間で、生活に或る程度の余裕があって、職業を捨ててでも川柳一本に飛込んで来られる男――。日本で初めて職業川柳人を宣言された麻生路郎の後継者にはこの位の最小条件は必要であったのだろうが、私にはその話に飛びつくほどの勇気も自信もなかったから、話はお互いの微笑の中で終ってしまった。

沢山の人材が居る不朽洞会員の顔ぶれを思う時、路郎先生のこの話も深い意味のない酒座の座興であったかも知れない。

靴

私の足の大きさは、足袋で云えば十文三分である。路郎先生の足は、定かには知らぬがやはり十文三分であったと思う。先生の足と私の足が偶然同じ大きさである事は、不思議な事件から証明された。

戦後（昭和二十三年頃か）路郎先生が拙宅へ泊りがけで遊びに来られた事があった。爆弾事件以来の冷戦を忘れて、神戸方と旧交を温めるよい機会だと思い、私は紋太さんを始めふあうすとの幹部級を数名招いて置いた。路郎先生を囲んでの柳談は、いとも和やかに進行し、まことに気持のよい一夕であったがその夜玄関に空巣が入り、並べていた靴が四五足盗まれたのである。気がついた時は後の祭、紋太・由峰等の靴がなくなっているだけでなく、路郎先生の靴も見当らない。青くなったのはウチの女房。何しろ戦後の物資不足の時代だ。革の靴などは貴重品で、古靴でも闇市に並べて置けば飛ぶように売れたものだ。被害を蒙った皆にお詫びを云うて、神戸の人々には取敢えず私の古靴や下駄を履いて帰って貰った。

路郎先生はその晩一泊されて、翌日大阪へお帰りに成ったが、まさか大阪まで下駄履きで帰って貰う訳にはいかない。

ところがその頃買い溜が流行った頃で、我が家でも新の靴が一足予備にしまって居た。恐る恐るその靴を取り出して履いて貰ったところ、丁度ピッタリである。

「ああ、これでよいこれでよい。これ貰っとく」

と、先生は前夜の空巣騒ぎなど全く気にかけぬように、明るい足どりで帰ってゆかれた。

以来暫くは、私の靴が先生の足にくっついて、四方の句会へお供をしていた筈である。

将棋

川柳は私の趣味と云うより、生活と云った方が正しいが、然らば君の趣味娯楽はと訊かれたら、将棋と答えるより仕方がない。戦後木見八段に教えを受けた事もあるので、云うならば大山、升田と同門であると自称（誰も本気で相手にしない）するのが私の自慢である。川柳では上手下手がハッキリ判らぬが、将棋は実力がそのまま勝ち負けに現れるので江戸の敵を長崎で討つ気持で、神戸の柳人を撫で斬りする事に興を覚えた。お嬢さんのお茶やお花と同様の免状持ちであるが、数年前作家の藤沢桓夫さん（五段）のお招きで、新喜劇の渋谷天外（初段）と新聞将棋を指して辛勝したのが自慢。川柳界では東京柳界のチャンピオンだった高島玉免朗や静岡の榎田竹林などを降した思い出もあり、川柳界で川柳の自慢をすると鼻ツマミにされるが、将棋の自慢なら笑って通るので、時々私はその話をする。

ある夜、ふあうすとの大会で須磨の寿楼に路郎先生と同宿した時、恐らく私の自慢話を心憎く思われたのであろう。路郎先生から、「一番指そうか」と挑戦して来られた。そして「一番勝負だヨ」と念を押された。

聞けば先生は、若い時には相当指されたらしく「強くはないが、一番勝負だったら負けた事がない」と云われた。

先生は三間飛車の石田流でグングン攻めて来られた。この型の将棋は一手受け損じると忽ち乱戦になって、実力の出しきれぬ内に敗けてしまう。一番勝負を所望された先生の覇気が、ありありと盤上に再現されたが、幸い守りを固めた私の勝に終った。厳格な路郎先

生と図らずも将棋を指した宿の一夜も、私の川柳生活に、変った意味での懐しい思い出である。

忘れられぬ言葉

路郎先生が書かれたもの、語られた言葉から、深い感銘を受けて、それが私の血となり肉となって、今も私の心の中に脈打っている事が多い。

川柳を人間陶冶の詩だと云われた先生の教えは、今私の胎内に入って「世の中の為になる川柳」へと生れ変っている。

又ある時、某社の句会を評して「向うから来るからこちらも行くで、同じ人間がどの会にも行くだけでは、盛大なように見えて絶対数は変らぬのだ。あれでは長屋のつき合いだ」と云われた言葉も、そのまま私の胸に生きている。ぐるぐる句会巡りをする人間を目標にせず、日の当らぬ場所に居る人へ手を伸し、一人一人同好者を育てて行く努力を続けたい。これが路郎先生の遺訓だと、私は心に思っている。

麻生路郎・蔷乃先生（奈良）
（昭和18年・雑誌奉遷の年）

父を想う

西村梨里

父が亡くなってまる三年の月日が流れた。日頃慌しい生活を送っている私にも、ようやく父がこの世を去った……今はもう父と話すことも出来なくなったのだと云うことが、頷けるようになった。

しみじみと父のことを思うとき、私は嫌でも父と共に過ごして来た日のことを、川柳と共に過ごして来た日のことを重苦しく思い出す。

凡そ譲歩すると云うことを知らなかった父は、ついに自分の思い通りの人生を生き抜いた。私が書こうとすることは、父の人格を或は傷つけるものかも知れないが、父の存命中には云いたくても云えなかったことを、一度は誰かに聞いてもらいたいと思う。

川柳を社会化するため、当時不定期刊行だった柳誌の月刊々行、東京大会や、朝日会館を借り切っての「川雑」一〇〇号記念など次々と奇想天外なことをして来た父は遂に昭和十一年職業川柳人となり、川柳家から白眼視されながらも終生その意地を押し通したが、考えてみれば意地だけでそんなことが出来たのではない。北川春巣先生が弔辞の中で「十七文字に魅入られた人生であった」と、云っておられるが全くその通りだと思う。それらのことも後になって云えば何でもないことのようでも、人に先馳けてやると云うことはなかなか、まして私達が子供の頃には「川柳って何や」と云う人が多く、「俳句のようなもの」だと云って説明しなければならなかった時代であって、川柳人口もかなりふえ、川柳が盛んになった今日でも朝日会館を借り切っての川柳会をするなど、おそらく至難な問題であろうと思う。

父は非常に性格の激しい人で雑誌が刷り上って来ても誤植を見つけると「あっ」とびっ

くりするような声を上げて「こんな誤植がわからんなんて……」くどくどと腹立ちを繰返すのだった。またちょっとした家族の者の落度に対しても、この上ぼろくそには云えないだろうと思うくらいに、人を叱るにしてもありったけの力を傾けて叱らねば気が済まないような父だったが、晩年はやや普通の人になっていて、時には私達の言を入れてくれることもあった。こうした性格なので父の許を離れて行った弟子もあると思う。何と云っても浄瑠璃語りが三味線を習ったり、芸者が踊りを習ったりするのと違って、趣味人を相手なのだからと私はいつも云うのだが、よくもこの父について来て下さったものだと多くの弟子の方々に只々感謝せずにはおれない。

父が職業川柳人となった当時、私はまだ小学生で何も知らなかったが、今から思えばその頃だったと思う。母が心臓病で倒れたこと、調味料にもことかくような日もあったこと、書棚の本をかかえて古本屋へ行く父、何時もしてもらった誕生日のお祝がして貰えなくて泣いたことなど、子供心にそうした事を今も覚えている。このような生活がどれくらい続いたかは覚えないけれども、私は世間の川柳家にこれだけは知って貰いたいと思うのは、父が他に職業がないからこの道を選んだのではないと云うことだ。

当時の高商を卒えた父が、他の職業につけばそれ相当の地位で迎えられたのに、五人の育ち盛りの子供を抱えてたべられない社会へ飛び込んだのだと云うことだ。それからどのようにして来たか私は知らないけれども、恐らく文字通りの苦難の道であったろうと思う。それがどうにか軌道に乗るようになった今日では「あれは川柳を食いものにしているのだ」と云う見方をしている人が、おそらく弟子の中にでもいたと思う。私は或る人から直接こう云うことを聞かされた。その人は詩人で純粋だからこそ、直接こうした事が云えたのだと思うのだが、父が或る人に謝礼金を請求したことを、職業人だからこそきたないと云われた。まさか今時、詩人だからと云ってカスミを食って生きていられるような人があったら、お目にかかりたい。まして仕事をするためには人も雇っている。食わずに仕事をすれば美しいのだろうか、その人からは後援の意味で雑誌に広告を貰ったこともあるし父の味方にもなり、後援もして貰ったし、私は感謝しているけれども、その時それらのことを思きせがましく云われたとき、なぜか胸を強く突き刺される思いだった。勿論趣味雑誌の広告などというものは広告の価値を考えるよりも、後援の意味でしかないのは承知である。それだけに広告料などと云える程の額でもない。他のどんな趣味にくらべてみても微々たるものでしかない。それでも川柳の世界では大きな後援であったのだ。

私達一家がたべられないとき、お世話になったわけではないのに、私は思わずその人の前で泣かずにおれなかった。私はこの口惜しさを永い間かみしめながらも、父の存命中にはやはり云うことは出来なかった。私が今こう云うのは決して川柳家に弓を引く気持ちで云うのではない。川柳をお金儲けの道具にして来たのではないと云うことを亡くなった父のためにも、また残された私達のためにもわかって貰いたいと思うだけである。父が川柳以外のものすべてを捨てる気持でこの道を選んだとき、私達はまだ幼なくて父の行動をとやかく云うべき力もないまま知らずに引き込まれた世界ではあったが、成人してからは父に対する批判も持ち、子供としての立場も主張した。父は川柳のために殉死しようとも悔はないだろうが、私達はそんな巻き添えは食いたくない。かつて文科を志して親の許しが得られずに廻り道をした父は、子供達には希望の道をとかねがね云っていたし、最も理解のあるはずの父ではあったが、家庭の事情がそれを許さなかった。私は父に色んな形で反抗した日もあったし、口論するようなこともあった。あの気の強い父が本当に涙を流して「済まなかった。もう川柳は止める」と云って泣いたことを今もまざまざと思い出す。

然し父に川柳が止められようはずがないし私達もそこまでは期待してはいなかった。結局は何となく父の巻き添えを食ったような生活がつづいたが、こうしてみんながこんなことをしていてもし父が死んだらどうなるだろう、女の私はまだよいとしても男の兄や弟には将来がある。何時も大きな不安と焦燥の毎日であった。何だ彼だと云いながら父の仕事もまあまあ軌道に乗り川柳で生活していけるようになり、子供達もおそまきながらそれぞ

れの道を選んで川柳の家を出たが、今思い返してみても永い々々重苦しい私達の青春時代であった。来る日も、来る日も編集や校正に追われ、友達と約束をして郊外に出たり、映画を見たりなどと云うようなこととは縁の遠い明け暮れであった。

父が死んだ今、既にそれぞれの道を選んで歩んでいる今、いまさら父にうらみつらみを並べようとは思わないが。これ程の犠牲を払ってするべき仕事だったのだろうか、それ程川柳と云うものは価値のあるものなのだろうか、いや、価値があろうとなかろうとそうせずにはおれなかった父なのだろう。私は今、父の死を悲しむ気持とは別に嵐が止んだ後の安堵に似た気持をゆっくりと味合うのである。

路郎先生の初心時代（1）

清水白柳

今年の七月七日が来ると、路郎先生が逝かれてから満三年になる。その間先生のために何をしただろうかと思うと申訳けの無さに身の縮まる思いがする。あの時葭乃先生から頂いて帰った古柳誌の中から路郎先生に関係のあったものを整理しているうちに眼についた文章や句を書き抜いて置いたのが少し溜ったので年代順にまとめて見た。

路郎先生の名句は句集「旅人」に網羅されているが、先生の初心時代、或は若かりし頃の作品を読むと、あの偉大な近寄り難い厳粛な先生にもこうした時代があったのだという近親感が湧いてくるのである。いらぬおせっかいをするなと、あの世で苦笑して居られるかも知れないが、現在の初心者も努力次第では立派な作家になれるのだという安心感のようなものでも与えられるとしたら望外の喜びである。

川柳塔昭和四十一年一月号に、すゝむ氏が「水府・千松の百句会」という一文を書かれて、路郎先生の前の雅号が「千松」であったということにふれられて居る。そしてその文中に「先月は曽て天涯として知られた千松君が現れ」と当百先生が書かれた一文を引例して居られる。これによると、天涯・千松・路郎となるのだが何年に天涯を千松に変えられたのかは判らないが、千松から路郎に変えられたのは、明治四十四年四月頃という推定が出来る。それは「水府・千松の百句会」が同年三月十九日千松庵に於て催されているのでその時はまだ千松と言って居られたのだが明治四十四年七月一日発行の「わだち」創刊号には麻生路郎で、作品、評論を発表し、編集後記も書いて居られるので、四月以降であろうと思う。

雅号のことについては、大正八年五月号の「絵日傘」三巻三号に興味のあるアンケートがのっているので全文を御紹介したい。

質問書

1 貴下が川柳に親まれました動機を簡単に。
2 最初に自句を掲せられました雑誌又は新聞名と其年月日と其時の句を一句。
3 最近御自信ある句を一句。

麻生路郎

1 明治三十七八年、自分が高商の予科に入学した時、クラスで新聞や雑誌を取った。其の中に読売新聞があった、当時読売新聞では、田能村朴念仁、後に朴山人が柳壇の選をして居られた。そして読んで見て非常に興味を感じて作句しはじめたのが川柳を作り出した動機と言えば言える。その時分には今の窪田而笑子氏も投句家の一人であった。

2 読売新聞に載ったのが始めでしょう。切抜帳とか控とかいうものを持って居ないので年月日と其時の句はどんな句であったか記憶しません。その頂から幾度も改号をし

たので勿論路郎では載っていません。路郎という号を使用するようになったのは明治四十三年頃からです。

3　最近に自信のある句と言えば

上方をさして行くのが大工の子　です

大正八年四月七日

以上のようにのせられて居りますが、この他に、力好、鉄羅漢、半文銭、百樹、紋太、当百、五葉、水府、蘭華、青岸、大吉、蔦雄、久良岐、寛汀、の諸先生がのせられています

さて路郎先生が切抜きも控えもないと言って居られるその切抜が一枚「青柳」の二巻十号にはさんであったのである。それは「毎日柳壇」の切抜きで年月日は判らないが左の句がのって居る（毎日柳壇の選者は当百先生）

百科全書飾られた儘譲られる　千松

筆の軸噛むもうつつや物思ひ　同

惚性の飽性と見えてもう虚め　同

関西川柳社八月例会の句報は明治四十三年八月号の「青柳」二巻八号にのっている。

呼鈴の烈しさ恐る〳〵出る　千松

仁丹を噛みながら書く旅日記　同

同じ例会句報が同年九月号「獅子頭」二巻九号にもある。八月十四日関西川柳社例会

力石やう〳〵にして地を離れ　千松

切れ手紙妙な事をば口走り　同

「青柳」二巻九号　題「笛」　百樹選

針の手を止める会社の笛が鳴り　千松

霧の中助けて呉れる笛がなり　同

雑詠　久良岐評

土堤降りて石摺る人に散る柳　千松

関西川柳社十月例会十八日「獅子頭」二巻十一号に

別れの場琵琶の悲曲の一くさり　千松

行く雲と水の流れに琵琶抱いて　同

「青柳」二巻十号

黙読の書に敷島の灰が落ち　千松

「青柳」二巻十一号

嵐峡保津川に遊ぶ　大阪　麻生千松

岩の名は竿の先にて教えられ

帰坂后病を得て萩の茶屋にて静養致居候

検温器捨てゝ寝かへり斗り打ち

萩の茶屋芒の中に貸家札

萩の茶屋萩に芒に黄昏れる

萩の茶屋花に三脚据え惑ひ

紅葉狩吟行　十一月十三日　京都

温泉の道の紅葉は無駄に折取られ　千松

戻り駕紅葉の雨にぬれて来る　同

べからずを無筆は反古にしてしまひ　同

べからずの下に銭亀甲を干し　同

明石川柳社例会　十一月十日

大阪で昔名を呼ぶ人に遇ひ　千松

名を襲いでから角帯を締め　同

「獅子頭」二巻十二号　明石川柳社例会

改名をして欧米をこころざし　千松

「獅子頭」三巻一号明治四十四年一月号

関西川柳社十二月四日例会

国境に小手かざし居る橇の人　千松

「青柳」　三巻一号明治四十四年一月号

年賀状

ぽっぺんに初手はこわゞ〳〵息を入れ　千松

関西川柳社新年句会　正月二十二日

友もない工女　貯金を楽める　千松

「獅子頭」　三巻二号　関西川柳社例会

蒙蒲団日向に干せば牛乳の香や　千松

通帳　他の工女にそねまれて　同

豆腐屋の竹筒鳴らし濡れた剰銭　同

「青柳」　三巻二号　関西川柳社例会

応接の盆画に壁の生々し　千松

蟹の穴竹ぎれなどの差したまま　同

磯伝い眼のとゞくまで蟹の穴　同

「青柳」　三巻三号

神戸共進会々場にて

疲れし眼　疲れし脚へ外の風　千松

関西川柳社三月例会

編みさしの靴下に針錆びたまゝ　千松

超然たる処我れに似しか梟　同

放課後の塗板に籤る梟の画　同

物にすねたる癖父母なき身には　同

三月十九日　千松庵に於て水府千松の二人百句会を開く。五十句宛発表　川柳塔の昭和四十一年一月号に既掲参照されたい。

（以下次号）

川柳「椙元紋太句集」

定価　八百円　送料　百円

著者五冊目の川柳句集である。

発行所　神戸市長田区重池町一ノ一七一

三好兵六方

ふあうすと川柳社

近作柳樽

大阪市　小谷葉子

海鳥の羽搏き私の孤をほどき
レモンの香り新しい幸が欲し
もみじバックに藤のよろめき
命ある限り恋のスケジュール
さようなら心にたたむ京の夢

松原市　谷垣史好

灯明がゆらぐこの世に未練ある如く
春の灯に睫毛重たき物思い
闇が呟いている闇の静けさ
公害日本　人の心もうす汚れ

倉敷市　藤井春日

つけ睫毛惜しい見合となりおおせ
異議なしの一声すかさず決をとり
目覚の先に女房が時を告げ
新課長八尾の浅吉好みなり

羽咋市　三宅ろ亭

天晴れの芸当やれず性悲し
すぐ動く心を心案じてる

若本多久志選

ボタンにはやはりボタンの花がつき
日曜の農家は雨が気に入らず

出雲市　王紫

蟻の列部課長らしいのが督励
雲いくつ繋いで亡母に未だ足りず
人間の脆さの果を罪と云う
蕗蕨筍ガス代はね上り

大阪市　藤田頂留子

鳥羽へ一泊旅行

釣り舟の波の間に間にとんび舞う
磯の香も胸一ぱいに志摩の海

室生寺へ参詣

父と見え母ともおもゆ石仏
石楠の香り大師は笑み給う

大阪市　和田痴亭

全開のガスの炎（ほむ）らよ恋若し
母の墓落花を浴びて浄土とし
反骨の片鱗孫の黙否権
憤ったらアカンと医者に釘さされ

竹原市　三宅不朽

海へ来し掌と掌ほのぼの父ぞ子ぞ
母の日だせめて素直にすどさんか
新緑へ火をふきそうな朱の鳥居
秘密もつごとし葉陰のイチゴの朱

姫路市　前田芙巳代

平和らしくなって混血の子成人す
まだ逢える人だからさようなら
約束はしないが信じあえる手と瞳
誤診だった善人としてのカルテ

大阪市　河内屋源七

四畳半一間月賦の中にいる二人
生ビール約手の期日など忘れ
貧乏も左ギッチョも父に似る
泣ごとを並べてみてもみな他人

大阪市　奥川継之助

無理言わぬ子よ貧乏がありがたし
人生へ振り子のような朝を起き
まちがっていようと恋の射程距離
握り飯妻の手大きいなと思い

竹原市　時広一路

雑音は気にせず自分の道を行く
大会社だから不振へ救いの手
欲張ってみても指から砂は洩れ
方言もまぜて司会者そつが無し

米子市　八木千代

春の陽に衿のよごれをとがめられ
逢いたさをたたんで女の芯燃える
貞女という噂をある日重たがり
釣好きに添って予報を聞いて寝る

島根県　山本文子

恐いものにされて明治の父折れず
チューリップ野生に帰えりたくかえりたく
うなだれて折らるるわらび春愁し
うねうねと欲情かくさず春の海

京都市　明嘉彦

神話からつづく世エレキギター鳴る
笑いは家に置いてきた婦人帽
さよならの言えぬこころを知る涙
すがりつくような視線へ聴診器

今治市　米子映月

表情を素早く読んで孤児無言
嫁かぬ気の命打ちこむ舞扇
決心を酒と女にゆすぶられ
義理よりも命が大事医者を変え

島根県　志賀美栄

大空へ山むくむくと青くなり
夢でなく逢って泣きたい遠い人
月に対峙し切々たり孤独
一笑に付し悲なし夫婦愛

広島県　岩谷　二三枝

夕映えの一幅点晴の雁わたる
逆ろうた果てを川瀬の小石なる
死魚の瞳に弱者の怒り凍るなり
蝶の陶酔緋ぼたんの緋に埋もれ

大阪市　江城　功雄

ヌードショー見る人格を言う勿れ
鍵っ子は鍵っ子どうし昏れ残る
世辞と知る若さへ脊割ラフに着る

鳥取県　鈴木村　諷子

唇の寒き日黙ることに決め
花嫁のお添えのように写される
人生の最短距離を突っ走り

東大阪市　坂東若芽

二十年目お花見

花吹雪花に埋れて臥てみたし
教育ママ頭デッカイ子に育て
夫唱婦随ですと夫に肩もませ

米子市　林瑞枝

じゅうたんのロビーで解けた荷にあわて
内職をあわてて隠し母迎え
セールスの名刺が貯まる小ひき出し

守口市　岸本豊平次

これでよしとする日少なく酒をくむ
早起きのパパがしかられる日曜日
二代目は余技に力を入れたがり

島根県　堀江正朗

その日その日の倖せ積み重ね
夕焼ける景をまぶたに画いてみる
ちゃぶ台の手さぐり憐れにも見えん

島根県　堀江芳子

喫わぬ夫と添うて灰皿気がつかず
あわて者と叱って済んだ傷でよし
愛じっと瞼を閉じてあたためる

大洲市　堀内暁風

蟹の泡ぶつぶつ不平云うて逃げ
斗病へ生き抜く努力ありったけ
旅帰りやっと素足になる安堵

東大阪市　坂上山椒坊

炒豆へこわごわ挑む総入歯
煤つけたまま猫のランデブー
水虫が一足早く春を告げ

大和郡山市　中内孚彦

角材で革命なんか起せまい
蒸発はしたが又水に戻るだけ
家庭教師はご近所だけへの見栄

京都府　菊沢破天

言いきかす方が泣いてる村はずれ
ききとれぬ声で払いを断わられ
いさかいの脈たち切れぬ米をとぎ

笠岡市　高木渋柿

あたしの歯ははずれぬと孫不思議なり
祖母あちゃんは関係ないのと保育園
二人の為に世界はあると孫二歳

八尾市　高杉鬼遊

枕木のその下にいる石が耐え
燃えさせて吸われてタバコ捨てられる
シャッターへ桜もいれた天守閣

東大阪市　竹中肖二

正露丸飲んで消毒したお腹
甲冑を美しとみる五月晴れ
還暦を祝ってくれる老妻一人

豊中市　河本雪男

似てほしいところは似ずに低い鼻
せっかくの椅子を合併脅かし
納税に来たのに税務署無愛想な

竹原市　森井菁居

まごころを酌がれる里の酔い心地
垣に寄りかかるほか無きクレマチス
アララギの誌友となって病みあがり

宿毛市　瀬田美知

つつしみが肌着に陽の目みせずほし
辞書の活字小さいからかなでかき
帰らないツバメへ雨戸しめのこし

香川県　西山綾子

此の暮しビリから数えて何番目
スタミナと値が気に入った鳥のもつ
説明を印刷したい顔の傷

宇部市　櫛部いさ夢

恐妻家趣味は日曜大工だけ
悪いのは私ですと逆をいう
鍵っ子にグチ聞かされる石地蔵

米子市　河瀬茂人

易者がほめたほくろを大じにし
幽霊が出そうなとこで語る恋
涙までためてチャンネル子はうばい

大阪市　堀口欣一

国電で課長課長と見苦しい
神父さん何思いけん赤いシャツ
母の背中に幸せな子が眠り

京都府　福村飛龍

自動車の当るクイズはまたはずれ
黒と白犬の世界は仲がよし
飛石の飛んだ土曜がにくらしい

大田市　藤田軒太楼

矛盾とは知って時流に逆わらず
平凡な幸せ今朝も送られる
レベルの違い一歩あとから従いて行き

大阪市　河原林比呂路

散らかっても心落ちつく吾が書斎

伝説に人間の弱さみつけたり
来てやった貰ってやったが添いつづけ
新居浜市　村上水軍

讃美歌の中に白粉匂う顔
物言えぬ犬の疲れは土に伏せ
どたんばを妻の勇気に支えられ
鳥取県　有田とし江

哀しみの心も知らず牡丹咲き
花へくる二羽の蝶にも恋の春
想い出があるから春雨美しい
羽曳野市　中沢風太郎

よう笑う女で幸福そうに肥え
夫待つままの姿勢で眠り込み
硝子の向こうで金魚の目が綺麗
河内長野市　小川耕人

春近し通天閣も高く見ゆ
三代に仕えた机で指揮を執る
一流へ電車で通うランドセル
呉市　槇田英詩

春霞瀬戸の島々今日も浮く
回転椅子で宿直社長になった夢
来賓は会費代りの酒と来る
大東市　斎藤さかえ

転居通知川ひとつ越えただけ
スマートな指で取柄のない男
水打って庭の緑を見てもらい
河内長野市　井上喜酔

ライバルへゆとりを見せる茶をすすり
ほんのりと酔えば色気の出るマダム
伝説の橋でガイドの名調子
竹原市　生信笑子

花かおる私の春はどこへいた
泣きながら食べながらあのねあのね
水ぬるむままに心をささげしに
広島県　高橋鬼焼

洗濯を西陽へ廻す妻のちえ
定期券さかさに見せて少し酔い
妻にだけ言える話を持ちかえり
七尾市　松高秀峰

母の日の母も田植に忙しく
奥の手と云うセールスに美人が来
目で合図ぐらいできかぬ子に育ち
小松市　四方天弘美

伝統は矛盾のままで受けてやり
流れ去る苦楽の中に子が残り
干竿で泳ぐ鯉にも陽が光る
鳥取県　谷無閑

屋台での話題は右派と左派の論
春の野良一枚脱いで天をつき
冷却を待って一合所望をし

八尾市　宮西弥生

よそいきの言葉もくずれクラス会
愛される術知ってから口上手

大阪市　黒田真砂

交わらぬ愛それぞれの道を行く
髪梳いて明日逢う人を待つ心

河内長野市　森本黒天子

会釈すれば無心の会釈戻って来
横断歩道園児の傘を見送らせ

広島県　南条露声

味噌汁がこんなにうまい旅帰り
助手席で妻もブレーキ踏んで居る

姫路市　大久保大夢子

百姓に一桁足らぬわが暮し
奥様の味山菜を喰べ残し

大阪市　田中多幸

行楽へ花の命は考えず
鬼のような心も秘めて美人なり

高知県　山川勝子

でっぷりと重役並に禿げて平
兎も角も子を連れて出る子供の日

大阪市　西本保夫

恋愛か見合か有料トイレット
ベテランやないかと平をおだてとき

島根県　小砂白汀

黒人が唄えば天をうらむ声
蝶々の姿で毛虫花をなめ

守口市　田中笑風

どしゃ降りのプラットに傘の忘れもの
斗病の頃もありクコ咲き乱れ

北九州市　藤田独楽

お見合の話題選抜野球戦
答辞よむ吾子涙でよく見えず

愛媛県　嶝本満子

胃カメラのお世話になっただけですみ
家中を敵にまわしてチャンネル権

堺市　斎藤亜也

街路樹に燕不在の春の雨
うまかった筈だよとツケを見せられる

八幡浜市　別宮すき

大物に遠くマイホーム主義
あこがれはブーツでしたの初月給

尼崎市　中谷利美

特価品ばかりで紳士でき上り
女子大出うっかり才女と買いかぶり

諫早市　原田明春

給料と物価仲よくオニゴッコ
常連は今夜も手酌でほっとかれ

鳥取県　中川定人

メーデーは歩るき物価に追いつけず

年頃の男にされていたと知り　石川県　瀬森利彰

登山服も若い好みでピーコック調
都市集中残るは山と戸籍だけ　堺市　羽田義一

借金をして迄カラー買えと云う
幸せをホームに残しハネムーン　竹原市　岩本文晴

闘争の無い人生だった折りかばん
大物になれぬ僕だと思うとく　八尾市　高杉力

灰色の中の緑に稀少価値
帰り道今日はお隣りカレーらし　八尾市　高杉千歩

征きしまま還らぬ声を夢にきき
リング交さず二十年つかの間に生き　大阪市　加納楽々

細腕のオヤジにすがる夜の地震
名も知らぬ朝刊くばる子と会話　大阪市　太田里栄子

花の短冊読めないままに通り抜け
花ぐもりコクリコクリの天主閣　岡山市　行吉照路

童謡を合唱川となって寝る
連隊旗のように赤旗デモの先　和歌山市　ふきあげ虎城

勲一等こんな身近かに住んでいた
コーラスでは虫も殺さぬ顔になり　竹原市　出島静波

反発もします二十才の血がたぎり
蟻引いて帰るにパンが大きすぎ　羽曳野市　前川桂馬

故郷にも銀座通りとパチンコ屋
外出は健康そうな顔で出る　岡山県　目賀芳月

満ち足りた暮しの中にある不安
煙にまく術会得して課長なり　石川県　国分狂興

そもそもは田植えに行ったことが縁
婚約が成り生き生きと田植の娘　羽曳野市　麻野幽玄

春の日の花に心を寄す孤愁
テールーム背中合せに恋を聞く　横浜市　瀬森崇

特売場女の欲がによきによきと
歌のような世界は二人の恋でなし　米子市　源氏勝久

酔眼のうすきみ悪い眼がからみ
立ってはるさかいに母も使われる　鳥取県　藤本佳女

うま過ぎる話へうっかりのった悔い
難聴へゼスチャーまぜて話し込み
鳥取市　藤本恵子

赤り書きお八っは水屋とさびし過ぎ
まだ眠い朝を母ちゃん起しに来
鳥取市　山本珂也女

ウインドのマネキン見てても娘を想い
スト終るラッシュへ記者のインタビュ
京都市　藤本征山

春風が尼僧の胸をのぞきに来
借用書名刺の裏で通る顔
鳥取市　藤本鎭也

約束を破る事情は走り書き
さわやかに今日一日の服を着る
豊岡市　不二本和久

子の声が僕に似ていてギョッとさせ
夫婦旅行のアルバム何度も出してみる
東大阪市　竹中綾女

青嵐に石楠花の散る室生寺
母の日に嫁は財布を娘は傘を
島根県　大森孝華

もつれ合い岩肌縫うて藤匂う
とけ合わぬ背中あわせの床飾り
貝塚市　行天千代

はたけ一枚鉄筋の家に化け
膝乗り出したとこでパッとコマーシャル
守口市　樋口一峯

性別を見まがうモードもの悲し
仏間から御布施せかせる鉦が鳴る
鳥取市　近藤秋・星

母の日の母の白髪にハッとする
君はたち物のあわれはまだ知らず
出雲市　板垣草丘

血の薄い農婦にたよる献血車
働かねば食えず女でない動き
芦屋市　丸川愁電子

ミニルックくの字の足が街を行く
お茶席でテストされてる膝小僧
岸和田市　葛木三郎

鉢巻の方の魚屋ようはやり
いろは坂にほへのあたりバスあえぐ
大阪市　宮本地楽

名園になるほど石に見る調和
反応も無いラブレター書きつづけ
高槻市　山田スミ子

雑草がここにも生きていた新芽
花だよりかかわりのない暮し向き
寝屋川市　福富隆子

晩酌のくせを見越して子はおそい
大阪市　塩浜一路

野崎参りお染を知らぬミニスカート　和歌山市　辻　徳次郎

若い頃は音痴で音楽評論家　泉佐野市　大工千代

同窓会話題は十九に若返り　泉佐野市　大工静子

病床三日何も喰わずによくしゃべり　石川県　多賀芳夫

春泥をつけて田植の昼休み　尼崎市　平井露芳

辛抱の見本叙勲の時の人　八尾市　古川鶴声

釜ケ崎儲けただけを飲んでいる　鳥取市　谷尾透風

悪酔いがかばう味方までからみ出し　鳥取市　藤本和宏

胸張って行けと父の眼味方する　鳥取市　小谷章代

夕焼けが私の心の色に燃え　鳥取市　河口忠志

岩をかむ故郷の海が眠らせず　鳥取市　山口宴司

偶然のように見合いをさせられる　西脇市　影山啓吉

のどかな日犬のあくびをじっと見る

弓削川柳社創立20周年記念

第20回西日本川柳大会

とき　昭和43年9月8日・午前8時30分から

ところ　岡山県久米郡久米南町
弓削小学校講堂
（国鉄津山線弓削駅下車徒歩五分）

兼題　（雅号の五十音順）　**川上三太郎選**
「まるいもの
または丸いこ
となんでも」

「笑　顔」　**中島生々庵選**
「走　る」　**福永清造選**
「勝負師」　**榎本聰夢選**
「パトロン」　**石曽根民郎選**
「　恩　」　**三条東洋樹選**

席題選者（当日午前八時半席題発表、11時しめ切り）**長野文庫・大森風来子・丸山弓削平**

出句しめ切り43年7月末日必着。
（事前出句制・各題二句・原稿用紙に題と句を連記・住所氏名《雅号》明記。）

会費　投句二百円（発表誌郵送）
出席した場合、投句料以外に当日百五十円

投句先　岡山県久米郡久米南町
弓削川柳社

川柳

明治百年（四）

—昭和篇—

「川柳雑誌」から

清水白柳

昭和三十三年

正田美智子皇太子妃に定まる

時の流れをハッキリ知った皇太子　路郎

清潔な方よとそっとのろけられ　同

南海丸事件

えらいさんの方が忙しい事故が起き　圭水

勤務評定

ちと叱りすぎて先生気にかかり　元山

赤線問題

いらんことしいなと女郎がこぼしてる　豆秋

○丸逝く（三月十八日）

朝　新聞を見たら友人が死んでいた　路郎

李ライン

李ライン政治ぐらいではかどらず　侃流洞

吉葉山・鏡里引退

横綱を止めてサインも下手になり　没食子

若の花勝ったかと服を脱ぎながら　豆秋

文五郎を見る

弟子たちに人形のように付き添われ　一三夫

炭鉱終閉山

寂しさはあとも う十日の合言葉　豊年

減税貯蓄法案

金持ちの為にばっかり法が出来　むじな

関門トンネル

エレベーター海底へ行く音でおり　季賛

九州の子が犬連れて遊びに来　蘭

ここからが九州などと海の底　実男

第二次岸内閣成立

改憲に足らぬ数こそもの憂けれ　没食子

総入歯直す歯医者をかえてみて　水客

大阪で街を静かに運動

いま気がついたよに　街を静かに　路郎

サックドレス流行

サックドレスお目出度ですかとたずねられ　与呂志

昭和三十四年

皇太子殿下御成婚

御成婚飲むより外に手を知らず　路郎

他愛なく妃の髪がすぐ流行り　敏子

御婚儀のテレビに老の血が踊り　丁路

氷井荷風逝く

荷風の死　皆は貯金の方へ触れ　路郎

警職法反対

もやもやを肌に識ってるから怒り　永断

引出しの開けっぱなしで春になり　香林

日韓問題

ままならぬ世に韓国という隣り　一瓢

フラフープ流行

フラフープ荷物に余る子煩悩　宵明

松屋町あきらめきれぬフラフープ　柳志

メートル法施行

一アール幾らで売るかに手間をとり　灯竿

ヘクタール結局坪で駄目を押し　柳志

松川事件

松川事件より稲の穂が気にかかり　甲吉

松川へ平次親分呼びたいな　好祐

伊勢湾台風

ローソクの光る柩は水が垂れ　大八

あの辺にテレビが潜む黒い水　同

ゴム長も足もふやけて屋根と水　同

生きのびて赤いリンゴをただなでる　同

羅災者を喰って日本人の顔でいる　無鬼

災害へ自民社会は喧嘩せず　灯竿

泥水で仏壇洗う老いた人　一念

台風へ都市よあなたはもろかった　柳志

★

▼川岡霊眼子氏（諫早市同人）宅で、このほど寛政初期の浮立笛がみつかって話題をよんだ。（長崎時事新聞から）

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二—四
夜間 (762) 四四〇八

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

タンポポを踏んで測量団が去に　（きさ子）

タンポポやれんげの咲きそろう田園のあちこちは、ながい冬の重圧をおし退けて、陽春を迎えた悦びがひろがるが、そこへ思いもかけぬ測量団が四五人来て測量を始めた。近隣の人々はびっくりしたが、やがて測量団は立ち去った。あとには、不安と好奇の眼ざしがひそひそ話をはじめる。家が建つらしい。ああ此処の田んぼもなくなるのかという嘆声が呪咀の声にかわる。民衆はいつも下積だ。

戦後、こうした光景は見馴れているが、吾々は割切れないものを感じる。この作者は、いつも敏感にこれを捉らえ、句にする。この句も「測量団が去に」があと味を濃くした。

四恩かみしめれば入れ歯きしむなり　（柳　志）

四恩とは、天地の恩・国王の恩・衆生の恩・父母（ぶも）の恩のこと。一つ一つ深かきいわれがあるが、中にも父母の恩は、最も重しとされている。父の恩は山より高く、母の恩は海より深しと、幼少から頭の中へたたき込まれていた旧時代でさえ、忘れられ勝ちのもの。まして現代では、ふふんと鼻であしらわれそうだ。世に行い難きは人の道である。

晩年になると、如何に大切であるかが分かるが、血気盛んのときは軽視されやすい。如何とも致し難いのである。この句の「入れ歯きしむ」は、慨嘆ともとれ自嘲とも取れる。

悩みなど吹きとべ春の風だもの　（英　子）

如何にも若人が若さを謳歌したような句だが、そうとは限らぬ。これは万人共通の感じである。花咲き、鳥うたう春という季節は、そうしたものなのである。

若人が恋をするのも春。デパートがごった返すのも春。交通事故が夥だしくふえるのも春なのである。ただ単に、この句のように、これだけ言っても、川柳は句になる。しかしこの句は、「春の風だもの」という下句に、人に訴えるものが強く生きて居そうに思う。必ずしも安易な句とは云えないのである。

病人の散薬だけでせいがなし　（みのる）

くすり馴れがした病人の、すてばちなところがある面白い句である。

病人はすぐ注射をすれば治ると思うし、身辺には、錠剤とか、ビタミン剤とかふんだんにくすりを蓄えねば、気が済まぬ人も出来てくる。みな病気は、くすりで治すものと錯覚して居る人達である。

ところが、くすりは単に気を鎮（しず）める程度のもので、病気は時期が来れば自ずから治るものであろう。金のある人には、くすりも道楽であるところがおもしろい。

秋吉台　石の饒舌　雲の黙　（薫　風）

山口県の秋芳洞のまわりは、昔から有名な地点であったらしい。NHKの新日本紀行はわが郷土の勝れた良さを最近教えてくれた。じかに行くよりずっと良く分かる。

紀行句は、単なる報告にとどまらず、何か作者の発見がほしいものである。ひまがあり、金の余裕があり、遊び廻るだけで無いしるしに、人を引きつける何かが欲しい。

その点この句は、秋吉台の景勝をつたえるに、「石の饒舌」と「雲のたたずまい」をとらえた。充分作者と共に感懐にひたれる。

銀婚式うちの女房に髭があり　（雀踊子）

「あなた明日は銀婚式ですよ」

「ヘエソウカもうつれ添うて、二十五年になるか」

「いつのまにか、来てしまいましたね」

「厄介をかけたなあ。お前、ちょっとこっち向けよ。ヘヘエ髭が生えたなァ」

「いやですよ。明るいとこで見ちゃ」

銀婚式は、働らき盛りだからたいていは、忘れていて、時が過ぎて気付く場合が多い。

が、ささやかながら奥さんの肝入りでご馳走をととのえ、夫婦子供を交えての銀婚式はたのしい。この句にも、いろ気が出ている。

兄さんと呼ばれる恋ではかどらず　（実　男）

男の方はとうに成熟して居ても、女性はまだあどけなく仲々恋が成就しない例はたくさんあり、めずらしくないが、何んとなくほほえましい連想を伴いがちだ。

気が弱い男は、女にとって魅力でもあり勝手に振るまえる。男はしびれを切らすが、女は元来性的に開花のおそい方が自然なのか、男が恋をうち明ける機会をすら呉れない。その内に男女の運命が意外な方へ発展する。というテーマは小説によくあり、面白い。

狛犬がくしゃみしそうな花吹雪　（阿　茶）

阿茶さんは、茶目で、仲々男勝りなところのある、得難い作者だが、最近は古稀になられ、おとなしかったがこの句は面白い。

狛犬の横着なつら構えに、降りそそぐ花吹雪があたり一面に乱舞する。その状景が「狛犬のくしゃみしそうな」で遺憾なく表現されて見事だ。恐らく阿茶さんの茶目さが、苦もなくこの秀句を生んだものであろう。

やわらかな陽射しへおしめ解いてやり　（一　栄）

この句も、作者の良さが発揮された作品のように思う。ふつう凡手であれば、「おしめかえてやり」とするところだろうが「解いてやり」とした自然のもち味が、この句を引き立てた。

「かえてやり」では事務的で、何ら句がはたらかないのである。川柳は、一字もゆるかせにできない、いい例証であろう。

取沙汰や寺に盲の子が生まれ　（清　生）

普通「や」という文字は、川柳では使わないのをよしとされているが、この句は例外である。「や」が意外にひろい意味をもった。

お寺の坊さんの行状は、昔から意外なものがある。とされて居り、身体不自由児が生れたところで、何等不思議はない筈である。しかし世間はうるさいのである。それからそれへとあらぬ事が伝えられやかましい。

坊さんは居ても立ってもいられぬ思いであろう。そんなことを思わせ、この句の「や」は、大変重要な働らきを見せたのである。

お隣に負けてなるかと百合の丈　（九呂平）

百合という植物は、造りにくいもののように思う。吾々が幼少からなじんだ百合は、色の赤い「鬼ゆり」という種類だが、今は上品で、野性味に乏しい品種になった。

この句の百合は、どんな品種か不明だが、元来、匂いのいい西洋種ではないかと思う。せい丈ばかり競う性質のものではないのだから、肥料や水をやりすぎたものであろう。

この句は、「百合の丈」で面白くなっている。この頃は植物にもブームを伴い勝ちで、研究熱心が様々な珍種を育てる様になった。

酒と言う悪魔ベラベラ喋らせる　（一乃字）

酒は元来魔物であって、飲み過ぎると全く人が違ったようになる。キリスト教で酒を禁じているのも当然だ。しかも酔ってくると、自分で自分のしている事が分からなくなるのは厄介だ。

この句のように、平素無口の人がベラベラ喋り出すと、あっけにとられる。自分では分からないのだろうかと、尊敬の念も消える。

それだけのことだが、この句は、その異常なさまを勇敢にとらえた。川柳なる哉だ。

遠き国恋うるか象の鼻ふりやまず　（千　梢）

この句は二字、字余りだが、それが却って句を面白くして居る観がある。今日本に来ている「象」は、主にインド種で愛嬌がある。

坊ちゃんや嬢ちゃんに人気があって、何か物をなげ与えると、鼻の先で器用に口へ運び入れる。そのせいか始終ハナをぶらぶらさせているが、とても愛嬌がある。

インドやタイ、ビルマの象もおり、又アフリカ産もいる。遠い国のジャングルの中からこの日本へ運ばれて来たのだが、果して象にも望郷の念があるもので、あろうか。しかしそれは、象に訊かねば分らぬこと。面白い。

「諷詩龍沙吟」
（石原沙人・青竜刀）刊行
著者七十才を記念し「遺書」として後世にのこすべく、戦後自作の諷詩（俳句、川柳の総合）約二千章を収録。付録に「**大陸風物吟竜沙句帖**」を収め、**六八年八月出来予定**。頒価送料共一〇〇〇円。**申込先**東京都世田谷区瀬田町八四四**石原青竜刀**。

自選百句

傘さして居たい二人へ晴れてくる
ありあまる餌へ神馬は目をつむり
すし詰めの我も衆愚の一人なる
菊生けるうしろ姿へ暇乞
つつかれて亀忍従の目をつむり
倖を祈る頭を低く垂れ
浮世絵の美人は靴の履けぬ足
大阪に居ます住所は書いてなし
あひるの子飛べる翼と信んじ切り
無理をした金に水引掛けて出し
実家へ帰り考えますと走り書き
配当にかかわりもなく馬走る
金のあるうちは大阪よいところ
諦めて見れば何んでもない女
簡単にあやまることも生きる手か
釣鐘の由来を聞いてから鳴らし
水濁り過ぎてもやはり魚住まず
鳴る時になって釣鐘見上げられ
金魚の眼だまされまいとするあせり
箒目に砂のいのちは生かされる
女とは悲しき性よ手をつかえ
寝るだけのことに夫婦の身づくろい
ピストルが手許にあっただけのこと
聞えてたのかタクシーきっちり止めてくれ
だしがらになるまで男働かされ

声変り言葉少なく用を足し
釈放のように退社のベル響く
ほどほどに酒のむすべを子に教え
恋にもブレーキ此処らで対手の出方待ち
背を向けて拗ねた襟足和室よし
カーテンで涙を拭うほどに慣れ
紛ぎらして打消すつもりの涙落つ
銭亀が好きで無口な生れつき
働かぬ人のハンカチ真白し
案ずれば切りが無い世の判を押し
金貸した方がせかせか歩かされ
堪え忍ぶことのみ多き世に生れ
同情を覗み返えした精薄児
覚悟した二人へ叱らぬ親になり
排気ガス名所の松を用捨せず
かくくどく恋を聞いてるがらす越し
ダイヤの冷たさ肉身を寄せ附けず
神様も許す範囲のロマン抱く
意地捨てて会いに行くほど角が取れ
くもりのち雨を覚悟で二人逢い
からくりの冴え人形に血が通い
胸バッジ飼われて居ますという印し
強いこと言うても女乳が張り
忙しい人ばかりではない超特急
風のある日とは雨だれ知らず落ち

・同人特集・

菊沢小松園作品

立膝のまま拝まれる観世音
ジングルベル聞える窓を閉めに立ち
知恵づいた子供に夫婦気をつかい
道具です貰いなはれとすすめられ
丸顔が船場育ちの気に入らず
仲裁の機嫌ほどには納らず
顔の皺心のしわに気が附かず
ラッシュアワー怪我して死ねという如し
恥部さらけ出して都会の夜が更け
明治大正昭和と生きて手内職
うろたえてやめた客だけ損をせず
働けば食えた時代の座りだこ
明治百年自動ドアーに迎えられ
肩抱いて花火見てたも二た昔
仏にも修羅にもなれずひとりぼち
負けて勝つ覚悟が出来て手をつかえ
菊人形無理なかたちに咲かされる
骨壺に身の振り方を尋ねたい
洗い流せば元の白生地
人形の首も明治が恋しかろ
帯解けば帯もあなたの方を向き
春うらら吉祥天女の御ひとみ
はらいせに戸樋の落ち口あっち向け
結んで開いてこの子妾の子と見えず
家のこと問えばフーテン空を見る

絵にしたい恋は明治もなかばまで
人間同士になって家裁の門を出る
ひかえ目の恋を哥磨絵にのこし
真っ盛りの姿で造花捨てられる
僕が居て君が居て星が流れる
よい加減にしといて来いとあの世から
あした要る金をはずみで引き受ける
置きこたつ明治の型で寝てしまい
ただ一人を思うてからの人嫌い
浮き上るチャンスも無くて雑魚もろこ
筆の立つ才女で手紙ひまが入り
平常着のままで一番泣いて呉れ
初一念に遠い姿で飯場に居
素うどんへ身の振り方を考える
雑魚どもは対手にはせぬ懐ろ手
片附けるこたつへ猫もついて来る
西陣の帯はカラーに向いた色
たいこばし思わぬ人の肩が触れ
負けて勝つつもりが負けたままになり
事故現場今日桜の花が散り
手暗がりのままで荷札を書く落ち目
露路うらへ世間を拗ねた風が吹き
シルエット見ている方が眼を伏せる
さくら貝明日は他人に拾われる
こんな日もあると元旦雨に暮れ

自選百句

落丁に似た人生をみんな持ち
なんの字を引いたか遺書の　横の辞書
誤植のまんま　育ったような僕
食卓のこれは包んで帰る鯛　—29・10・不朽洞賞
日本間へ主人も読めぬ軸を掛け　—32・12・不朽洞賞
槍架けた家風が徐々に電化され　—33・10・不朽洞賞
棺桶に　もしやと思う音がして　—34・2・不朽洞賞
テーブルマナーどうあろうともぎっちょなり　—35・10・不朽洞賞
先代の無言がいっそ偉人にし　—36・3・不朽洞賞
天皇のレジャーはカニとたわむれる　—36・5・不朽洞賞
きのこ雲神を忘れた形で立ち　—36・8・不朽洞賞
太陽が露路を素通りして昇り　—31・市長賞
人間はいいなと陛下　孫を抱き
戦前は「陛下」が「階下」でクビになり
仁義を忘れ梅ぼしの味を忘れ
造形の神の不出来が瓜二つ
闘志満々三角形の尖端よ
節操をまげない足袋の　右　左
さびしさのかたまりだとさ人間は
走らねばまわってくれぬ風ぐるま
抜かれても抜かれてもバスの運転手
手にとって見れば桜のわびしさよ
シーズンは乞食も花の下で食い
墓地に住む蛇は女の精に見え
やっぱり好人物だった　臣　茂

全市停電むかしはこんな星月夜
通訳がハハハと一と足さき笑い
英文の賽銭箱も法隆寺
アドバルーン大仏さまに持たせたし
なめくじは完全犯罪出来ぬなり
熊がおじぎしてると人間が思うだけ
土佐犬の元横綱は飼いごろし
植木鉢の底でみみずの子が遊び
正座した姿で蛙　餌を狙い
せがまれる蛙がうまく描けぬなり
燕ほど父は運んでくれぬなり
姉妹の一人が美人でも困まり
鼻見えぬ横顔でよし妻達者
娘三人みな惚れられて嫁っちまい
わが姓は一代かぎりそれもよし
母映画きょう売店の書き入れ日
売店はぼろいするめが売れ残り
入場料ほど売店で子に食われ
売店を過ぎたら背なの子をおろし
ラムネ冷えきって売店閑らしい
本番という火が銀幕焼き落とし　—小阪東映全焼
選外というペンだこを頼りにし　—売店廃業
近松も五十からだと励まされ　—豆秋氏からの激励
たこ焼き屋やれと文筆あなどられ
こんな静かな真夜中を人は寝る

・同人特集・

不二田一三夫作品

素うどんがうまいと思うほどに落ち
遠い先きのともしび信じ歩ゆまんか
憎悪し嫉妬し羨望して作家
パパの作　ラジオの前へかしこまり
台本の負けアドリブへ拍手くる
生活向上　やっと四球を得たほどの
しまい風呂ちょっと泳いでみたくなり
朝風呂で男のきたなさ話しあい
喪服まで借りて来たのに持ち直し
不幸にもダイヤが似合う掌に生まれ
奥様にすまぬと云いつつ逃げもせず
接吻のあとのうがいを見つけられ
女四十もうあわてないあわてない
奥様に化けっきれない仇っぽさ
あれだけのきりょうで民生委にかかり
産婆もう堕ろしのほうで食うと決め
服む化粧などと薬もいそがしい
葬式で茶柱立った茶をよばれ
賑やかにお通夜してやと遺書かなし　―豆秋氏の遺書
抱きおうた白骨のまま検屍され　―ある殉人夫婦の死
講談本包んで土工旅に発ち
質屋出て少年少女肩を組み
マッチ一本に男の頭下げ
定期だけ戻ってきたのもスリの義理
焼き鳥の匂いで駅がすぐわかり
貧乏人の足音へ子猫ついてくる
足の小指をこんなに虐げて
寄せ書きに貧しのあるのがぬけぬけと
つり銭に似た人生もおもしろし
席順に不満か　大家すねて去に
自称詩人当用漢字がわからない
出来ぬ子の鉛筆きれいに尖がらせて
十カ月払いのように産みおとし
拝み屋と医博の診立て同じなり
処女作が当たっただけで消えていき
大阪弁つかえば教養ない如く
大阪の雪　あわれにも泥となり
人生の傾斜へころげまいとする
前座ある日楽屋の隅で泣いていた　―寄席
奇人出ず小粒になった芸わびし
高座より司会のほうで名を知られ
台本が読めずテープでおぼえこみ
しゃべくりの自信ないのが楽器持ち
高座では妻子に見せぬ顔も見せ
ひょんなとこで笑われカンを狂わされ
相方に不遇で芸がすさみだし
手拭いと扇に年輪のぞかせる
笑ってるのは高座の二人だけ
落語家は活躍「落語」はさびれてる
辛らつな批評は客席からアクビ

自選百句

古木にも新芽老眼鏡を拭く
冬越してきたのに金魚さりげなく
約手落すだけで動いている工場
賞でられてなお下り咲く藤の花
笹買うて福が来るならちはなし
信心の尊さ無口の人に知る
よくもまぁ不足ばかりを拾うひと
無理ないと許す心がほぐらせる
昨日のわれ明日のわれを思うまじ
秋風がシャッター威勢よく上げる
後から見るべきものか　女
いい方にとろうと思う心の淋しさ
招待状出しましたがととぼけとき
戦禍なお海の彼方の墓洗う
試作品として長男に生れ
上座よりうっかり先に箸を割り
貸付けがやっとうなずきぬるいお茶
まだ六十もう六十のむつかしさ
本人はバースデーケーキよりお乳
時代のずれと少しは胸のおさまりぬ
お隣りのピアノも暑いもののうち
ロマンスシート誰に会うと妻と旅
脳軟下症とか秋の蠅に似る
シグナルの青さ自殺あったとは見えず
シャツは買い渋りチップは気前よく

物欲一代墓も枯葉が積るのみ
チップ置きあっさり帰る手も使い
希望通り別居はさせてこせついて
極楽は地獄の奥とわかりかけ
ショックかくすピースうっかり逆に喫い
鯛ほめて隣の鯖を買うも妻
欲望無限月の我が影ふむ如く
釣堀りに立つ辛抱は持っており
アイシャドー近くで見るべき顔でなし
税吏同士耳打ちをする気味悪さ
思い出の道は避けたし通りたし
失恋に泣かない女をさげすみぬ
ふと見付けたり妻のため息
食膳に掌を合わすここからの生活
天地から見れば争う蟻ぞ　人
釣革をそっと離れた衣裳負け
春雨へ女房と濡れるあほらしさ
愛想ようマダム貸しを忘れてず
聞き分けて別れると言えば腹が立ち
わが判断間違いなしにつまずきぬ
指先に秋を感じる頁繰る
二号の倖せ旦那より先に逝き
返盃へすわり直してるうちはよし
秋の雨よしマダムも酔うてくれ
五十やっと親のすべてがありがたく

・同人特集・

川村好郎作品

やっと連れて出た妻の目に青葉
もっと早う来いと集金断られ
つまらないしゃれもマダム以下笑い
有難いありがたいとただの仕事ばかりして
うしろ見せ待ってるらしいいい女
芸者一代私生児だけ遺し
銀行は貸すと信じている会議
満でよし数えでもよし日々新
秤のような女心のみだらなる
縁が無いのですと仲人労わられ
忠孝という文字ありき墓碑も朽ち
真実に生きんこの一瞬もいのちがけ
新歌舞伎座妻の小じわがよう目立ち
貸さぬとも貸すとも云わず庭へ下り
歌手さえも若手の時代と論す妻
素直なる水の流れをまだ見つめ
群集の流れに我を失わじ
密談へ経理部長がまた呼ばれ
重荷でしょうねと女拗ねはじめ
お隣の小まめを妻はほめちぎり
飲ましもしたのに貸付もう替り
絶景どころかバスの運転手
この次は僕が奢るを軽う聞き
さて春になればだるいの眠むたいの
気苦労を知ってて課長叱りつけ

生花か造花か真実うすれゆき
金だけで解けぬなやみを聞く夜長
今に気がつくと本妻なだめとき
会者常離けれど奇遇を喜ばん
不足きりなく喜びもきりがなく
筆まめな梅里手紙もくれぬ旅
水掛けるまい寒がりだったナー梅里
道問えば女一足あとへ寄り
久し振り水に流せぬのも女
布はしを噛んだチャックに似た会社
秋空よ私をゆるしてくれており
生かされている自覚ここから第一歩
お嬢ちゃんうちには過ぎると断られ
金だけの好きではないとまだ思い
居たい人帰りたいひと通夜の席
ふてくさる心の奥がいとほしく
願うより願われている掌を合せ
桜なら堺刑務所いま見頃
云い負けてきて扇風機1を掛け
おごらす気タクシー代は払っとき
この椅子にともかくおれとそのまんま
衆目を彼氏の方が気にしてい
不渡りのない散髪屋のうらやまし
団体だっかと女中立ったなり
さてとなれば逃げるひきょうを男持ち

昭和四十三年七月現在

川柳塔社同人

青木遊星　青野遊仙　青山慶之助　浅川八郎　浅野芳朗　麻生アート　阿部柳太　天見幸雄　阿万的　安藤桂仙　安平次弘道　池田あや子　池田古心　池田泉水　井阪東天紅　石居高志　石川侃流洞　石倉旅風　石坂新雪　磯島三石　磯野与志

伊丹阿喜良　市岡暁舟　市場没食子　出原直奇　伊藤泉睦　伊藤茶仏　伊藤ヒ彦　井上旭峯　井上湧三　今西章雅　岩田美代　岩本雀踊子　上田紅溪　上田翠光　上田利晴　上林加仙　植村客遊子　植山武助　魚住満潮　牛島水京　臼井三林坊　有働芳仙

梅田久雄　江国幽谷　江副牛亭　岡崎祥月　岡嶋芳道　大江秋月　岡田拳法　小笠原青女　小川静観堂　小川恒明　隠岐不酔　置田ふじ　奥谷弘朗　奥村丹路　大坂形水　大崎博正　太田良子　小田垣蝸牛　大谷月都　越智一水　大鶴喜由　大西八歩

小畑自有浪　小浜牧人　大森娯句楽　大山雅城　加川カロ女　笠原吸江　葛城伊三郎　金井文秋　神谷凡九郎　賀本昇　河相すゝむ　河井庸佑　川岡霊眼子　川口弘生　川竹松風　河原みのる　川端柳子　河村日満　河村瑞川　川村好郎　河内天笑　川端東雲楼　神原幸児　菊田いさむ　菊沢小松園　岸南柳　黄瀬美秋

北川春巣　橘高薫風　北村三歩　木村一路　木村千容　木村匡利　木村涼人　木山遠二　木山要次　楠田英子　楠本和三郎　草深酔升　国弘半休　久米奈良子　蔵本白梅子　黒川紫香　桑原喜風　工藤安亭　工藤甲吉　小池しげお　小島蘭幸　小谷仙山　高津徹也　後藤梅志　小西無鬼　小西雄々　小松義雄

児島与呂志　小畠無聖　小幡里風　小林孝正　小林トメ子　小林孤呂二　雑賀勉　近藤凡生　酒井五月　酒田清子　桜川不水　佐藤甘草　佐野卜占　沢田平八　直原七面山　島居百酒　清水一保　清水白柳　清水義介　清水谷句楽坊　城一舟　庄司萬象　新川博也　新谷笑痴　菅井智水庵　関戸宗太郎　傍島静馬

大工睦夫　高木桃里　田垣方大　高橋千万子　竹内圭三　竹浪浪寿　田中蛙眠子　田中狂二　田中十方　田中万里歩　谷沢好祐　田村藤波　垂井葵水　津秋六花　築山快夢起　辻圭水　辻白溪子　辻川喜仙　土谷亀一　寺田花宵　天正千梢　遠山可住　土岐トク子　都倉求女　友淵貴山　戸田古方

内藤きさ子
内藤幸子
仲どんたく
中筋三幸
中村九呂平
中村ゆきを
中川淳子
中川晃男
中川滋雀
永尾永断
中島小石
中島生々庵
柳楽鶴丸
長野文庫
永藤弥平
永松道雄
二越俊爾
新岡回天子
西いわを
西尾義一
西尾栞
西尾青一路
西岡洛酔

西川誓二
西辻竹青
西森花村
西垣錦風
西田柳宏子
西出一栄
奴田原紅雨
野村太茂津
野村味平
野村岬月
野呂鵜汀
野田素身郎
橋本緑雨
長谷川三司
服部十九平
羽原静歩
浜田光治
浜野奇童
浜畑胡蝶
早川清生
林葵丘
林夢虹

林昌男
林野甦光
原千里
原独仙
羽佐間柳葉
長谷川紫光
長谷沢義英
馬場夢生
馬場魚山
樋口舟遊
久家代仕男
菱田満秋
平井平
平尾太希志
平田実男
平田三十郎
弘津柳慶
福井野迷路
福井多蘭子
福島鉄児
福島正則
福田多可志
福田丁路

藤井明朗
藤岡花梢
藤本礎山
藤村〆女
藤原秋月
舟木与根一
古川魔花麗
細呂木魯木
本庄金三
本多清人
本田恵二朗
本多柳志
桝本路児
正本水客
前山北海
松岡委滄浪
松川杜的
松下たつみ
松下梁水
松塚美知代
松本吉太郎
松本忠三
松田半月
丸川初甫
間島青丹子
満生拝山

三井酔夢
満田銀風
水粉千翁
宮尾あいき
光好陽子
水谷竹荘
宮川珠笑
宮口笛生
宮地双楽
三輪峰円
村上旭童
村上春巳
村田瓢太
村山光輪

室谷鉄舟
森川すみれ
森下愛論
森田茗人
森本法泉子
八木摩天郎
保西岳詩
山内静水
山川阿茶
山本素郎
山本立児
横山一声
吉岡美房

吉田圭井堂
吉田水車
吉原紅月
米虫一乃字
若林草右
山上千太郎
山田季賛
和海草春
若本あき坊
若本多久志
若柳潮花
渡辺暁童
渡辺独歩
渡辺乱坊

人介　堺市出島町一丁五二
同　河内天笑
新紹　—好郎・笑痴—推薦

初歩教室

題「 躾 」

菊沢小松園

今月の躾は稍や扱い難くい題に属する。躾とは仕付けであって、いわゆる行儀作法を繰り返えし繰り返えして訓練し覚えさすことである。随って此の点現代っ子向きでは決してない、事実句の上にもこの傾向はよく見えていて、面白いと思った。

行き届く躾で子供こましゃくれ　綾女
預かった孫で躾もままならず　肖二
この場合日頃の躾が邪魔になり　美代
環境が躾のきかぬ子に育ち　鉄舟

①過ぎたるは何とやら躾というものの限界を知った第三者の眼は鋭い初五の皮肉がよく利いている。②責任のない行為ほど遺り甲斐のないものはない、預った孫の扱い難さもそこにある、眼に余る振舞いがあったとしても、懲しめること出来ず、況してや充分な躾など思いも及ばぬ、デリケートな心理がよく出ている③よかれと願って身に附けさせた躾でも時に臨んでは邪魔になる場合もある複雑な人間の生活には時に取ってこうした皮肉なこともあろう。見通し易いところをよく句にされたとおもう。④生活の環境がおよそ躾などとは縁のない処にあってその儘育った、悲しいが現実に斯うしたところもある世の中である。

あやまちは過ちとして認めさせ　紫静子
躾糸結婚以来のまましまい　政夫
我が子より犬に躾の金をかけ　とみ子
不躾な視線を追えばミニの足

①頭を使った句であるがこれより突込むともう理屈の域に入る躾の方法を教えられてるようで句としての余情に乏しい、理智に任せて創ると情感の少ない句になり易い。②原句三十年は譬え事実であっても誇張にとれる、この場合年数を限定せない方が余裕あってよい。③これはユーモアがあってよい。こんな人が私の近所にも居る本人は至極真面目で気が附かない、動物愛護も過ぎてはナンセンスである。④相当の年配の人にもこんな連中は居る。堂々たる体軀の持主にも欲求不満はあるゆめ油断のならぬ世の中である。

偉人伝昔のしつけがピンと来ず　保夫
雑草のように息吹けと躾する　静観堂
孫のしつけまでしようとは思わざり　同
追かける仕立おろしにあるしつけ糸　頂留子

躾とは別にゴーゴーもミニも好き　正朗

①戦後の感覚では偉人伝や立志伝に人気がない、従来の躾に対して現代っ子の反撥感がよく出ている。②雑草の強さに憬れたしつけこの場合の息吹けはよい句語だ、一句の力点が此処にあることがはっきりして迫るものがある。③人生の多事は時に思いも及ばぬ事にも出喰す、世俗を離れて悠々の余生を夢みて居たのに孫の躾まで背負わされるとは正に思わざりである。キャリアに物を言わせて深味のある佳作になった。④仕立おろしに取り残した躾糸に気付いて後を追ったというのであるこれは夫婦と見る方が情景が出る。⑤躾はしつけとして身に付けては居るが、ゴーゴーも踊ればミニも履く近代娘の明るい生活態度が躍如としている。

躾などなくて雑草よく育ち　吐来
さりげない妻のしつけに任せとく　徹也
ミニ着ても躾のわかるお人柄　英詩
躾をば褒めた途端にボロを出し　誓二
躾糸とって祭へ子を送り　李朋

①躾や行儀やと取り立てて喧しく言わなくても雑草の逞ましさと野生の力強さを以てよく育ったと云うのである。一面を突いている。②上五の用語でいい句になった、適当な語句を見出すことの重要な例であり、句を通して見る円満な家庭を窺うことが出来る。③尖端を行く服装の中にも滲み出る人格の床しさはある筈である。案外本当の躾のよさは業としからぬ斯うした時に現われるのかも知れない。④子供の正直さが見えて面白いし、その場合のバツの悪さも想像されて笑いを誘う些細な一瞬にも川柳の芽はある。⑤親ごころの行届いた凡帳面な家の句である。喜んで馳け出して行ったであろう子供の姿も浮彫りになって面白い。

今にして母の躾が身に泌みる　芳子

身のこなし母の躾の型になり　比呂路
呼鈴へ出た子しつけの良さが見え　軒太楼
盆栽へ過ぎた躾がいのち取り　白汀
氏よりも育ち躾がものをいう　利美

①上五の出だしがいい、亡き母への慕情と感謝も偲ばれて深味のある句になった。②母娘は争えず母に教えられた通りにかたちまで似て来る。③素直さが取柄ただそれだけのよく判る句。④盆栽の手入を躾と見たのが面白い併かも過ぎた躾への皮肉もよく利いている。⑤これも初五で一句の価値を決めた一本気な創り方も此の場合動かせぬものとなった。

子供より親をしつけた花の下　亜也
ママの躾不足は学校のせいにする　同
母として躾しますと折れていず　千代
よそさまの躾も明治気にかかり　同
いさかいが子供のしつけに触れさせる　千梢

①花見客の狼藉に抗議したのであろうが花時に限らず常に斯うした情景は見受けられるそうして親に似た躾の足らぬが成人して行くことになるのである。②これでは学校の先生が気の毒、自分の子供の躾さえ手の廻らぬ先生が多いのに。③母親として毅然たる態度は結構だが一時の虚勢に終らぬように、下五で句主の意図も充分に窺える。④明治時代のスパルタ式の躾に慣れた人達は譬え他人様の子供でもそのぐうたら振りは抛って置けない衝動に馳られる。同感と言いたい。⑤夫婦の諍かいの果てが子供の躾にまで及んだという深刻なものを感ぜさせる内容が考えさせる句になった。

幸せな躾家風を気にしてず　初甫
厳格に育って躾を子に強いず　瑞枝
有難い躾嫁入ってから気附き　同
近火でも躾は自分の下駄を履き　破天

①これは微笑しい、躾という堅さから開放されて幸せな生活に自然に身に附いたマナーは家風と言うような厳しさのない明るい明け暮れそこには近代的な新しい意味の躾と言うものが生れているのかも知れない。②自分の体験から強いて子供にはあまり厳しい躾を要求せないと云う、新しい時限に於ける親の在り方の一例を示している此処にも考える親の姿がある。③これは又反対に娘時代の躾の厳しさ渋々従わされて来たが今一家を持ってその真価に気付いて心から有難いと親への感謝の心持ちがよく出ている。女らしさがよい句を生んだ。④身に付いた躾は習性になって突嗟の場合でもなかなか離れない、近火だというのに尚自分の下駄を探して履いて出るそこに可笑しさを感じた見遁し安い些事でも句材になるものは身辺に転っている好例である、原句拭いて履きは誇張に過ぎてわざとらしい。

盆栽の無理は針金で躾られ　すき
しつけ糸かけたままなり遺品分け　同
嫁の座に母の躾が蘇り　真砂
新調の躾に母の情こもる　真砂

①人間の眼を楽しませてはいるが、針金を巻かれ引っ張られて歪曲される木には全く言葉が無いだけ迷惑至極、自由気儘に伸ばせない処を躾と見たのは面白い。達者な句風が頼もしい。②これは凡想浅い句になった、詠み古された境地は印象も薄い損だと言う他ない。③行き届いた親の情が主婦の座で生きた感謝の気持ちが一句を生かしている切りの蘇りがよい。④これはやや説明が勝って浅い、前句と同巧の句、前句を執る。

アベックの顔見ぬようにしつけられ　葵水
躾まで構って居れぬ共稼ぎ　弘美
ライオンの躾は鞭と餌でつけ　同

①アベックを振り返って見る間は本当の自由主義の徹底はないと言われる。もうそろそろアベックを気にせぬ時代が来てもよさそう。②共稼ぎの句は割に少なかった、生活の為めに躾まで及ばぬ意は判るが淋しい。反って共稼ぎの中から子供の躾だけは付けて行く努力を詠む方がよいのではなかろうか。③これはやや躾とは異なる、仕込むことであって厳格に言えば仕付ではないが広く解釈するとしてその目で見れば面白い、鞭と餌がすべてに通じる。

国会で躾の悪るい野次が飛び　小松園
躾糸のままの晴着が供えられ　同

八月二十日締切、十月号発表
題「月」
宛先
大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号
菊沢小松園

★

▼どんぐり川柳会は六月十六日、お染久松で有名な野崎へ吟行。好郎氏が指導する会だけに、グット愉快な一日であったとのこと。

七夕

安平次弘道選

七夕のような無沙汰をもてなされ　みのる
七夕に星のロマンもきかされる　魚山
七夕へ賀状以来の墨をすり　宗太郎
七夕が済んで捨て場に困る笹　冨多葉
七夕へ願いをかける娘に育ち　野迷路
年一度夏の夜空にデート待つ　どんたく
七夕さんですねとバーで迎えられ　どんたく
七夕さんなるほど下手な字と思い　どんたく
三代の字で天の川天の川　里風
宇宙論七夕さまの夜が更け　旭峯
久し振り七夕さんにされて飲み　旭峯
天の川今宵の星は美しい　旭峯
七夕の笹にも見栄をはる団地　旭峯
朝露で書く七夕の墨の色　旭峯
七夕に平和の願いこめて書き　とみ子
恋人の似顔も書いて星祭り　無閑
七夕の宵へわたしを置いてみる　千翁
逢う人に逢うて銀河のきらめきぬ　千翁
七夕へこの世の欲を書き並らべ　柳子
七夕へ集う小ちやな瞳がきれい　露声
高校生もう七夕を手伝わず　いさ夢
天華粉の児らに七夕迎えられ　恵二朗
恋仲を七夕さまに見てもらい　恵二朗
七夕を迎える浴衣縫い急ぐ　恵二朗
七夕へ交通安全書いて吊り　秀峰
幼稚園の頃の記憶よ星祭り　恵子
商魂が大七夕を飾りたて　和久
感傷にひたって寡婦は星祭る　和宏
織姫が泣き出しそうな雲が出る　征山
逢いたさを織女に祈り星祭る　季賛
七夕の子等のプランへ逆らわず　代仕男
初恋の目に素晴らしい天の川　軒太楼
星空へ七夕の夢飛躍する　継之助
七夕のムードで恋を書いて出し　史朗
七夕をダシに商魂たくましい　七面山
思い出の中で七夕美しい　十九平
アパートの窓へ祭つた星祭り　佳
七夕は天然色でうつされる　暁明
笹竹へ子の名妻の名天の川　宗太郎
七夕の笹の高さに抱き上げる　初甫
伝説を銀河今宵のために冴え　千翁
短冊に子は子の願い星祭り　勝子
七夕を保母美しく児に語り　藤波
七夕へ育ちましたよ夏野菜　白汀
七夕の空に孤独な星がいる　可住
七夕のムードへ科学邪魔になり　軸

別居

小谷仙山選

家の有るまでの荷物で独り発つ　暁明
予定日が延びて別居がまだ続き　公輔
別居する家計細かく縮こまり　愁電子
別居にもみせてあげたい子の育ち　冨多葉
栄転の課長当分寮に住み　弘朗
次の恋もえて唯今別居中　英子
ほっとした日も淋しい日もある別居　綾女
別居して上手になった玉子焼　里風
意地づくの別居日記へ詫びている　梁水
栄転が続き別居がまだ続き　秀峰
別居する条件つけて嫁がくる　壮樹
折れて来る日を楽しみの別居なり　春日
別居する程の希望校僕になし　和宏
一ヵ月の契約で老妻孫に貸し　恵二朗
別居して互に稼ぐ児の学資　道雄
自由でもあるしそうでもない別居　素身郎
別居とは云うものの目と鼻の先　保夫
療養の別居は妻子待ち兼ねる　勝子
まいた種噂になっている別居　千翁
別居していても夫婦に子が産れ　古心
愛すればこそ別居を語り合い　軒太楼
別居など望まぬ気立て愛される　白汀
倦怠期別居は少し効き過ぎた　芳仙
別居して貯金もできる筈だった　木魚
別居して雑居の味を懐かしみ　ろ亭
孫生れ別居の壁が薄くなり　豊平次
出稼ぎの父へ鉛筆なめた文字　芳子
別居して自由に暮す味気なさ　宗太郎
伝染を恐れる別居愛足らず　十九平
それぞれにスポンサーがついている別居　みのる
憲法に肩身のせまい日の別居　甦光

別居中の二人どちらも浮気者　七面山
老いて子に従う筈が別居され　葵　水
子に合いに行くホステスは母の顔　史　朗
佳

別居する乳房と知らず子は眠り　無　聖
別居でもするかと夫婦仲がよい　露　声
別居まだ仲人の出る暮でなし　みのる
別居中一人者だと押通し　征　山
心は別居同然目下倦怠期　恵二朗
人

別居した隙へマダムの赤い爪　山椒坊
地

其れとなく医師に別居をすすめられ　無　閑
天

別居して猫にもの言う日がつづき　紅　雨
軸

父母達者内だけ別居許される

ライター

吉原紅月選

三つ目のライター何処かで又忘れ　誓　二
重役の煙草ライターが寄ってくる　史　朗
ライターは使わずマダムのマッチにし　芳　子
キッスするようにライター口によせ　祥　月
春山のリュックへライター如才なし　季　賛
持って居るのにライターを差し出され　いさ夢
ライターを取りにおいでと電話口　露　声

ライターをわざと忘れて又来る気　柳　子
ライターでやっと鍵穴探りあて　百　酒
ライターを手品のように出して？け　初　甫
新入社ライターぐらい持っており　暁　明
引出しにお古のライター二ツ三ツ　弘　朗
ライターへ紅唇ぬっと迫って来　みのる
ピストルに似たライターでおどかされ　七面山
バーの灯へすぐロンソンを出したがり　芳　仙
予備校へ通うライター買わされる　木　魚
ライターで眉毛を焦すほど慌て　宗太郎
はしたない言葉ライター点けて消し　継之助
ライターでおみくじの凶焼き捨てる　大江秋月
ライターの音に孤独をかみしめる　公　輔
ガスライター青児の裸婦と待たされる　李　朋
禁煙をしたのにライターのプレゼント　十九平
ライターを持ってマッチ持って去に　藤　波
ライター分解日曜小半日　客遊子
ガスライター使えと息子置いて行き　肖　二
ライターの気ままを養子ゆるされず　可　住
親指の感度へライター少し拗ね　甦　光
ファウルだとわかってライター出す余裕　無　聖
ライターが照すアイシャード妖気帯び　どんたく
道連れの女ライター持っている　里　風
ライター点滅あんなときにも二人連れ　素身郎
ライターがぽっと夜霧のバスを待っ　旭　峰
集金のママにライター屈けられ　葵　水
佳

ライターまで買うて高校喫い始め　恵二朗
ライターより先に女のマッチが来　芳　仙
帳尻が合わずライターの火もつかず　秀　峰
パチパチパチライター如きに見くびられ　古　方

ダンヒルへホステス媚びてるなと思い　富多葉
人

贈られたライター楽しい夢を抱き　和　久
地

ライターの音沈黙の座へ響き　梁　水
天

ライターで小さい証拠隠滅す　宵　明
軸

ゴルフ場へ行くダンヒルは別に持ち

★締切以後に着いて、選者に送稿できない場合はボツになるので投句は早目に。

旅行・宴会・リクリューションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本　社　東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03(733)6951
守口出張所　守口市京阪本通2-18
三洋電機㈱本社食堂内
TEL 06(991)1181 内線588

第二百四回（復活第九回）

大萬川柳

「貞操」

入選発表

選者　清水白柳

投句総数　六百四十二句

入選　五十五句

女セールス貞操危機の日もあって　大阪　静波

貞操が何んだとガムを噛みながら　倉敷　三林坊

慣れ慣れし過ぎて貞操疑われ　大阪　滋雀

何もかもささげ貞操疑われ　豊中　古方

敷かれ放しという貞操もありました　藤井寺　吸江

子沢山母を貞女にしてしまい　八代　史朗

メロドラム程には女よろめかず　大阪　真砂

貞操の価値を知らない子に慌て　門真　鉄児

かろうじて貞操守る足袋はだし　東大阪　清人

真感した女ピンチに身がまえる　大阪　双楽

生活が派手で貞操うたがわれ　鳥取　日満

貞操なんかどうだっていいのほせよう　大洲　暁明

貞操は貞操私は私という女　堺　草春

過去のこと云わぬ夫へ操立て　阿内長野　耕人

事業欲貞操までも捨てさせる　島根　芳子

そのくせに初婚の女を希望する　岡山　十九平

慰謝料として貞操が値踏みされ　高石　好郎

不貞とも思い同権とも思い　高槻　静馬

一夫一婦律義に守っていて子無く　大阪　水客

貞操など考えたこともなく夫婦　和歌山　葵水

貞操が蒸発したくなるムード　和歌山　とみ子

貞操を割切り別れて又嫁ぎ　大田　軒太楼

生活が派手で貞操うたがわれ　鳥取　日満

負けそうになれば仏間へこもる寡婦　倉敷　素身郎

小説のようには貞操捨てられず　堺　青香

犬の気も知らず純血だけを強い　呉　甦光

貞操の危機がそこまで来てる仲　大阪　美房

貞操を女は武器としてかざす　米子　千代

貞女との噂さに若さしばられる　大阪　庸佑

ふしだらに見えても貞操だけは別　大阪　痴亭

底辺に貞操堅く夜泣きそば　笠岡　要次

貞操を捨てずにすんだ五月晴れ　岡山　文平

素晴しいボリューム貞操もて余し　宝塚　無聖

女ある女掠奪してほしい時がある　岡山　久米雄

貞操を抱いて夜道を帰って来　東大阪　若芽

金に負けぬ貞操愛にゆさぶられ　尼崎　慶彦

良心に問えと貞操疑われ　大阪　旅風

貞操を疑うときに男負け　京都　征山

ショール貫っただけで貞操疑われ　豊岡　和久

愛情さえあればと貞操軽んじる　泉大津　徹也

貞操は帯のきつさと共にあり　倉敷　恵二朗

貞操をえくぼで守り寡婦生きる

身から出た錆貞操を疑われ　小松　宗太郎

貞操を古い女として守り

証人になって貞操疑ぐられ　熊本　芳仙

貞操を家裁は金でけりをつけ

貞操をもったい振った日がおかし

面当てに貞操すててやる気なり

美しい心

美しい花

富田林　公栄社(07212) 2064

佳　句

大阪　県吉郎
この齢で貞操などとあほらしく

笠岡　要次
貞操がぐらつきそうで座をはずし

堺　一舟
すれすれに逃げたと夫見てくれず

大阪　形水
貞操を通すドラマへはがゆがり

大和郡山　孚彦
愛情の欠けた貞操守ってる

人ノ句

大阪　鉄舟
かすり傷ぐらいに貞操扱われ

地ノ句

宝塚　ゆきを
貞操の危機とも云える人に逢い

天ノ句

羽曳野　桂馬
貞操は守り浮気もしてみたし

選者　吟
たった一度のあやまちを女負う

大萬ベストテン（六月現在）
（同点ノ場合ハ投句先着順）

一　**素身郎**　一八、〇　倉敷
二　**文秋**　一七、五　大阪
三　**柳志**　一四、五　大阪
四　**弓彦**　一四、〇　大阪
五　**吸江**　一三、五　藤井寺
六　**水客**　一一、五　大阪
七　**好郎**　十六　きさ子　一一、五　高石
八　**ゆきを**　十七　静馬　一一、〇　宝塚
九　**清人**　十八　鉄児　一〇、五　大阪
十　**美房**　十九　要次　一〇、〇　大阪
十一　十九平　二〇　静波　一〇、〇　岡山
十二　日満　二一　鉄舟　一〇、〇　鳥取
十三　阿茶　九、五　大阪
十四　千代　九、五　米子
十五　慶彦　九、五　尼崎
十六　きさ子　九、〇　岸和田
十七　静馬　八、五　高槻
十八　鉄児　八、五　門真
十九　要次　八、五　笠岡
二〇　静波　八、五　大阪
二一　鉄舟　八、〇　大阪
二二　瑞枝　八、〇　米子
二三　恵二朗　七、五　倉敷
二四　草春　七、五　堺
二五　形水　七、五　大阪
以下略

第十一回「**剃刀**」五句以内
締切　**七月二十日**

第十二回「橋」五句以内
締切　八月二十日

投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五—六
川村好郎

雅号ぶっちゃけばなし（42）

ぶすい

おき

・酔不岐隠・

不酔なんて、本当に不粋な、誰がこんな雅号をつけたのだろう。勿論、僕自身である。僕は毎日一升五合即ち三立の酒がなければ日がたたなかった。肴なんか一切不要、酒と水さえあれば上機嫌、このため栄養失調で入院生活三年。ここで酒をプッツリやめた。序に一日六十本の煙草もやめた。そして川柳に転向し初めての句「せわしない光る鳴る降る又光る」が入選した。そして本日に及んだ。酒を飲まないから酔わない、不酔。僕の酒歴を知ってる者は、アレは何んぼ飲んでも、不酔だと悪口を言うだろう。禁酒禁煙十年間酔わず只生きることのみ。

（税理士六十五才）

大阪成蹊学園
丹青堂
電話 七二二、七二二
色紙短冊
書画用品

柳界展望

橋高薫風・担当

川柳たましま大会で生々庵主幹。

▼麻生葭乃先生は五月二十日来社、生々庵主幹や一三夫、葉子さんと歓談、非常にお元気だった。

▼直原玉青氏（守口市）指導の青玲社余技日本画展が六月十一日―十六日まで阪急百貨店七階催場で開催。玉青先生の台湾・アンコールワット風景展は大好評で注目を浴びた。なお生々庵、小石夫妻の作品も出展された。

▼菊沢小松園氏（大阪・理事）の四女千代さんが五月十九日夜、帝塚山柏原産婦人科病院で長女安産、氏には外孫第三号。―三人目は女電話は明日にする―小松園。

▼市場没食子氏（大阪・参事）川治温泉から―七日の本社句会に帰れなかったらよろしくご配慮のほどを―飲むだけが楽しみどこの湯も同じ―没食子。

▼川村好郎氏（本社副理事長）は五月二十九日堺市成人学校で講演、大好評だった。

▼八木摩天郎氏（堺・参事）が指導する万福寺婦人川柳会を中心に壇徒一行六十名が五月二十四日京都鞍馬方面へ周遊。

▼工藤甲吉氏（青森市参事）から、「あの時ぐらぐらっと来てまたぐらぐらっと来た時は、真実〝世も末〟を思い、そして孫を思い、ろくに口もきけなくなりました。いま、もしあれが夜中の出来事だったらと思うと総毛立ちます。〝治にいて乱を忘れず〟をいたい程知らされました。」

▼小泉紫峰氏（八戸市）から、「家人に怪我はなく商品の一部壁ガラス等多少の被害にとどまり不幸中の幸でした。柳友諸氏も私程度の被害につきご安心下さい。」

▼木村涼人・工藤安亭両氏（青森県同人）から、「川柳塔社同人には被害はありませんでした。」

▼成田我洲氏・後藤柳允両氏（弘前市）から、「弘前はそれ程の被害もなく柳人に故障はありません。」

▼西谷みさを氏（青森市）から、「激動する大地に立って身にしみる恐怖と孤独のとき、何にもまして力強いお見舞いを頂戴しありがとう存じました。」

▼岩淵一星氏（青森県）から、「津軽地方にはなんの被害もありませんでしたが、ドット来られた時には田圃にいましたので中風かと思ってあわてました。」

▼高田寄生木氏（青森県）から、「当地はわりに少ない被害でした。家具は少し毀れましたが、商品は靴なので被害ゼロです。本棚の本やカップや桶が殆んど落ちたのに一番小さい奴が逆立ちをしたまま落ちまいとするユーモラスな姿もありました。毎夜の余震には胆を冷しています。」

▼青森県川柳社創立二十周年記念川柳大会は昭和四十三年九月二十二日（日）午前十時から青森市市民会館日本間で開催。兼題は、カラス・坐る・のれん・生き抜く・ビール・親友・伸びる・旅路・踊・縫う・林檎、投句は百五十円封入の上八月十五日まで、青森県黒石市大字市の町青森川柳社二十周年川柳大会係。

▼清水白柳氏（大阪府理事）は五月十二日の玉造・南大阪合同吟行で女人高野の室生寺石仏の大野寺へ。大阪から二十三名、桜井から岩本雀踊子氏ら五名参加、地元の上田翠光、西辻竹青両氏も来会、十年以上の久濶をとり戻そうと作句そこのけで話し合われた。「古寺の闇釈迦はいつまで天を指す」

▼本田恵二朗氏（倉敷市参事）から、五月十九日付来信、「熊本から天草五橋、雲仙、阿蘇、山波ハイウエイから只今別府の湯と仲良しになっています。こんなよい心身の保養はめったに味わえぬなと思っています。『心まで阿蘇のみどりに染まりそう』」また、国際ライオンズの綴方に応募

玉造川柳会（大阪市）
七月十日（水）午後六時
題　不意・当分・執念
所　玉造交差点南一〇〇米　大阪信用金庫

堺・若芽合同川柳会
時　七月十三日―六時半
題　しつけ・湯上り・面
所　堺市九間町山ノ口筋　談　八木摩天郎宅

うまさの敵「シブ」を追放
〈生きた味〉
アサヒビール

二位に入選、立派な楯と賞金二万円を受賞、賞金は社会福祉に寄附された。綴方に川柳数句を織り交ぜて、論旨に柔かさと温かさと巾を持たせ、川柳を善用出来たと喜びを寄せられた。

▼西出一栄さん（大阪市同人）が市立桃山病院に入院された。ご快癒の一日も早いことを祈ります。

▼川村好郎・若本多久志・西尾栞・菊沢小松園・傍島静馬の諸氏は五月十八日十九日の両日丹波籠ノ坊温泉へ。途中篠山の小西無鬼氏宅を訪問、少年団の団服で若々しい姿の氏と歓談された。

▼水粉千翁氏（倉敷市）は四月二十一日土佐へ。四月の陽の中で田植が行われているので戸惑いますと—神代まで戻って竜河洞を抜け—五月七日には雨の京都で旅愁を満喫、八日には大徳寺で精進料理を楽しまれた。「すれ違う尼僧に京の旅が昏れ」

▼尼緑之助氏（出雲市参事）の主催するいずも川柳会は五月十二日大森吟行を開催。嘗ては二十万人の人口を擁した石見大森銀山も見るかげのない淋しい町になって、寺ばかりがやたら目につく感じであったと。

▼ひらない句会は五月十二日工藤安亭居で。

▼村上春巳氏（奈良市同人）と岩本雀踊子氏（桜井市同人）は五月十九日第三四回奈良県川柳大会で下市町西迎院へ。

▼島田兼孝氏（大洲市）から、「水郷大洲川柳も若い女性の方が増えて来ました。私も大会の雰囲気が好きでせめて県内だけはと努めて参加しています。」

▼清水一保氏（鳥取県同人）は国会と各省に陳上の為五月二十二日上京、霞ケ関ビル三十七階で、「一千万地上狭しと天へ伸び」

▼上田紅溪氏（ハワイ同人）から、「日本の皆様お変りございませんか。四季の変化乏しき当布哇にも先ばしりのライチーが店先きを飾り、マンゴもぼつぼつ熟し始める頃となりました。柳友一同平隠です。」

▼三井酔夢さん（香川県同人）は四国新聞創刊八十年記念「愛読者川柳大会」（五月十二日午後一時から県庁ホールで開催）の席題「酒」で第一席に入選、賞状と楯を獲得された。歳月は溺れた酒を糧にかえ」

▼池田あや子さん（岡山市同人）は、ますかっとの風来子主幹とお揃いで新車を入れ、神戸や大阪の令妹をマイカーで訪ねる夢を持っておられるが、当今のカーラッシュに恐れをなして、一思案中であると。

▼河村日満氏（鳥取県参事）は五月十四日来社。折悪く生々庵主幹ご不在で小石夫人と歓談された。

▼丸川初甫さん（芦屋市同人）は五月三、四、五日と上諏訪下諏訪、身延山、登呂遺跡、御前崎灯台と巡遊ことに駿河灘のドライブは快適であったが、美し過ぎる風景は句にならなかった由。諏訪御柱祭、「里びきの縄に乗ったり祭りの子」

▼西尾栞氏（八尾市理事）の二女、己波玲子さんは妊娠腎手術後、急性肺炎を併発、四月二十六日急逝された。年二十九。謹悼。

▼林瑞枝さん（米子市）は五月二十七日来社、一三夫氏、葉子さんと歓談された

▼松下梁水氏（倉敷市同人）から、新同人としての抱負が寄せられた。「笹舟の夢大洋の日を描き」

▼内藤暢哉著第二句集「阿羅波比」は五月十一日発行九百句と隋筆出雲蕎麦を収録、定価二百五十円、送料共。「南爪咲く日本は一夫一婦主義」。

▼平井露芳氏（尼崎市）は五月二日結婚、新居は尼崎市栗山北浦二〇六の四栗山ハウス内。「十年の遅れを埋める気の門出」

▼浅川八郎氏（富田林市同人）は五月二十三日退院された。おめでとう。

▼室谷鉄舟氏（大阪市同人）は五月七日別府から句信を寄せられた。五泊六日の予定で四国北九州を巡り、雲仙天草へとこれから目指すが、好きな地酒をたのしむ為、血圧の薬を持参の旅であると、「血圧も忘れて遊ぶ旅の酒」

▼藤村涼子さん（ニューヨーク市）は右手の指を負傷されて一カ月以上もペンを持てずにおられた由、今秋一時帰国されるご予定、とのこと、本社へもお立寄りを願いおきます。

▼橋高薫風は五月十一日から十三日まで、尾道、耕三寺、阿伏兎観音、鞆を観光、高鷲亜鈍氏と再会対談した

南海川柳会
時　七月十八日（木）夕
題　往復・つぐない・表紙
所　ナンバ高架下　親和クラブ

南大阪川柳会
時　七月二十日（土）午後六時
題　ヒロイン・人並・手応え・銅像・
所　生野区北生野町一丁目　大蔦川柳入選発表

国分町東三〇〇米乗願寺

本社 六月句会

会場　自安寺
七日　午後六時

37年1月句会から六カ年半、ホームグランドである自安寺と当分さよならをするきようである。感無量の人も多かろう。

白柳氏の柳話は、川柳と狂句の微妙な差を古句からとりあげ、また現代川柳が文字だけに頼る傾向を狂句に近づくのではないか、など本格的な柳論は久しぶりのものである。

川柳中興の祖、剣花坊先生が狂句の前へ赤信号を出され、今日の川柳の隆盛を見るにいったゆえんなど警告の鐘を打たれた。

川柳塔はじまっていらいの兼題選者ご難の日だった。没食子、薫風、白溪子三氏の欠席で幹事はアワを食った。

六月の句会杯は正本水客氏。また女流作家デーとなり、あいき、花梢、千梢三氏が天位を得られた。

（河井庸佑整理）

出席―与呂志・双楽・庸佑・一三夫・貞山・白柳・瓢太・いさむ・静馬・遊仙・生々庵・水客・痴亭・百酒・滋雀・鶴声・文秋・天樹・一舟・水京・言也・古方・柳志・照一・吸江・柳宏子・笑風・楽々・県吉郎・村雲・花梢・芙巳代・葵水・みさお・喜酔・弓彦・形水・肖二・綾女・摩天郎・トメ子・千梢・喜恵・宣介・葛城・多久志・金三・六竜子・誓二・小松園・舟遊・奈良子・凡九郎・栞・あいき・季賛・亜成・葉子

席題「マダム」　永田六龍子選

パトロンが大物マダムの巾がきき　与呂志
パトロンの視線気にしているマダム　喜酔
駅前でマダムと逢うた昼の顔　葛城
結婚に弱しマダムも欺むかれ　楽々
隣近所へ団地マダムの気の疲れ　柳宏子
貯めている噂質素に着てマダム　言也
常連へ血圧計のないマダム　天樹
煙輪に吹いてマダムの不貞くされ　柳宏子
先代の浮気も知っているマダム　摩天郎
パトロンの好みマダムの名で開き　滋雀
墓石へマダムの私語がしみている　天樹
マダムきょう地味に作って参観日　庸佑
パトロンまた変えマダムのリベラズム　多久志
パトロンの金で燕を飼うマダム　あいき
その頃のマダムに好きな人がいた　舟遊
道楽のようにマダムとして務め　花梢
介抱はしますとマダム如才なく　村雲
詩集読むマダムの何かドラマめき　一三夫
退け刻をマダム構えている気配　喜酔
失恋の酒がマダムへ泣きにくる　形水
こってりと塗ってマダムの暇な顔　葛城
嘘ひとつ抱いて真剣なるマダム　宣介
灯を消してマダム独りの酒をつぎ　遊仙
昼と夜マダム二つの顔を持ち　あいき
マダムの瞳に血めぐり悪い男たち　六竜子

席題「半　額」　金井文秋選

言うだけは無料半額でたいてみ　滋雀
半額にすれば警戒心が起き　楽々
白木みのる小児半額とはいかず　多久志
半額なら安いとサクラ一つ買い　六竜子
半額は踏み倒す気の前払い　白柳
犬連れたまま半額へならばされ　小松園
半額が気の引けるよな子の背丈　楽々
一掃という半額が売れ残り　村雲
半額の人生と知る共稼ぎ　遊仙
半額にまけると言われ恐くなり　双楽
半額へ時間と足代忘れかけ　千梢
半額品お一人様とならばされ　金三
半額で二倍買えたとむだ使い　綾女
店じまいまだ半額の日が続き　楽々
半額で買える徹夜の列へ立ち　柳志
半額は手形と聞いてちと迷い　誓二
半分だけ払うキャッシュを拝まれる　水客
今日からは子供切符でない背丈　柳志
半額に値切った植木もてあまし　摩天郎
半額でいいと元値はとる心算　水客
半額で名画たのしむ二流館・言也
半額で売る日は売ってやる如く　一舟
半額の値札へ虚栄手が出せず　一三夫
元聞けば半額出した阿呆らしさ　弓彦
半額は親から取る気のスケジュール　文秋

席題「音」　岡橋宣介選

サイレンの音に寝がえりうっただけ　花梢
伝票は納品すんだ音になり　白柳
ドアー閉める音にも秘書は気をつかい　吸江
音高く鳴る階段は反抗期　遊仙

順番の前に音痴は座をはずし　百酒
トントンと菜を切る音に知る機嫌　吸江
うりきざむ音コトコトと平和なり　痴亭
未だおこってるらし勝手の派手な音　水京
冷蔵庫子供の帰る度に鳴り　遊仙
かたくなリズム深夜の掛時計　芙巳代
姑は足音たてず朝支度　トメ子
何やろ何の音やろ寝つかれず　古方
音のする方へ幼児の眼がうごき　鶴声
補聴器で近所の噂聞き歩き　柳志
騒音の中にわたしの声がある　白柳
心重ねつつ今日また別れ愛無音　芙巳代
風鈴の音に小言をきき流がす　花梢
イヤホーンたしかに鳴ったらしい真夜　宣介

兼題「腕ずく」　八木摩天郎選

腕ずくで取った予算をもて余し　百水
腕ずくに金のないのが玉に疵　野迷路
腕まくる手に威圧する上り竜　祥月
腕ずくで国会切れを派手にやり　正朗
木に竹をついて腕ずく言いつのる　凡九郎
土壇場にきて腕ずくになる選挙　花梢
腕ずくで押切った夜の苦い酒　村雲
腕ずくで来るかと居直る無精髭　栞
ピケライン働く腕に押し切られ　柳志
腕ずくで争うほどの顔でなし　吸江
腕力がまだものをいう世のひずみ　村雲
結局は腕ずくとみて引きさがり　百酒
腕ずくで来いと自信は黒い帯　六竜子
腕ずくでまんまと技にしてやられ　静馬
腕ずくで娶った噂の女と知り　喜恵
腕ずくにしては相手が弱すぎる　花梢
腕ずくの手が特売へ絡み合い　滋雀
腕ずくも美貌も主役持ちあわせ　文秋
腕ずくへ挑む若さを笑われる　笑風
腕ずくでこいと上役あっけなし　季賛
サーカスは空中ブランコと云ジンタ　六竜子
腕ずくにもろい美人の妻だった　舟遊
腕ずくはあきらめどうやら泣き落し　生々庵
腕ずくが口八丁に丸められ　文秋
腕ずくになってライバルこわくなり　柳宏子
腕ずくになってしもうた痴話喧嘩　誓二
腕ずくになって和解に酒がいり　誓二
腕ずくで男の口をふさぎに来　水客
腕ずくの眉間に男の青いすじ　舟遊
たわむれに野心がのぞく力こぶ　天樹
腕ずくじゃ女なびかぬつもりなり　瓢太
腕ずくで来いと自信のある素振り　多久志
腕ずくで口説けばひじで断られ　柳志
金ずくの前に腕ずく手をつかえ　小松園
泣きの手にかけて腕ずく追返し　県吉郎
腕ずくで持って行かれた金のカタ　形水
腕ずくで取った遺産の小さすぎ　千梢
腕ずくで家出娘を連れもどし　言也
腕ずくときいて蒸発してしまい　栞
腕ずくに負けぬ女で惚れなおし　与呂志
腕ずくで来いと理窟でつまっとり　摩天郎

兼題「雑念」　戸田古方選

雑念はインターチェンジに来て捨る　旅風
生きている証拠雑念つきまとい　芳子
雑念も誰はばからぬ程笑い　与呂志
舌うちをして雑念をおいはらい　花梢
雑念を忘れドラマの人となる　滋雀
雑念もあって人間らしくなり　与呂志
雑念に負けまい読経乱れがち　柳宏子
雑念をまじえて姑の経がすみ　喜恵
雑念はつきず人生またたのし　吸江
雑念を払い写経の墨を磨る　言也
雑念が講師の話別に聞く　鶴声
たかが蝿一匹に縦断される思考　芙巳代
雑念のがれる旅に城がある　舟遊
雑念を無理に押える爪をかみ　柳志
雑念の縄えぬ余裕が気にいらず　百酒
雑念がさそた思案の方に決め　喜酔
雑念を晴す故郷へ来て泊り　摩天郎
生きている証拠に雑念つきまとい　双楽
母の苦も雑念もなく飲む乳房　県吉郎
産声が雑念サラリと除ってくれ　弓彦
雑念のなき日を庭の草むしり　宣介
雑念が初志貫徹をすこし曲げ　喜酔
雑念もない名人のこわい顔　水京
蟻を見つめるまなざしが動かない　白柳
只雑念とする人生の余白　公輔
雑音になれて静寂に気を散らす　芙巳代
雑念はビールの泡にすいこまれ　吸江
人間だ教祖様さえ悩みはる　小松園
雑念をやっと消したら眠りこけ　生々庵
シェーカーにつめて雑念ふり払う　天樹
雑念の闇はもやしの白さ持つ　水客
何も思うなと病人へ無理を言い　文秋
雑念のつぎつぎ動く蟹の泡　水客
気まぐれのように雑念邪魔をする　与呂志

雑念のない子で歌をすぐ覚え　文秋
雑念の向うにチカッと光るもの　形水
授乳時間ママの雑念も吸うてくれ　千梢
雑念になりそうなのは皆外し　古方

兼題「メガホン」　本多柳志選

メガホンのあとへ園児がよく並び　公輔
メガホンの角度を社長室に向け　昭三
ランナーの瞳メガホン振り向かず　静歩
メガホンで呼び入れといてしぼりぼり　日満
メガホンの俺にもあったこんな声　野迷路
法定の額でメガホン活躍し　百水
日当の声メガホンを空に向け　旅風
メガホンでスターを叱る親心　祥月
新聞まるめて清き一票子が真似る　芳子
メガホンでないと監督らしくなし　正朗
さようなら掌をメガホンに船送る　磯山
メガホンの近くへつんぼ座らされ　小松園
工事場でメガホン派手な合図する　季賛
腕章の手前メガホン持たされる　古方
メガホンの声長屋を突き抜ける　鶴声
メガホンに恋をさかれた貸しボート　花梢
メガホンで嘘の人生どなりたし　遊仙
メガホンも煤け静かな駐在所　静馬
メガホンを持てばわが子の頼もしく　水客
メガホンが昼飯にするビル工事　吸江
メガホンを持てば無口の人で無し　あいき
山へ呼ぶメガホン母の声も入れ　一三夫
メガホンの金属製は武器になり　小松園
メガホンへ斗志か湧いてきた若さ　笑風
ターミナルメガホン避けて行き戻り　楽々
迷い子へメガホン親を探してる　喜酔
メガホンはもう落選の声となり　一三夫
メガホンの通りにうごき団体旗　宣介
メガホンが追っかけてきた待ち合所　花梢
母のない子のメガホンは赤い羽根　照一
メガホンにされた新聞風に散り　みさお
反響のないメガホンとしる団地　花梢
メガホンが起して回る選挙戦　喜恵
退け時の足へメガホン無駄な声　形水
メガホンを持ってるだけで引張られ　吸江
大学の雀メガホン驚かず　痴亭
たかがメガホンで地球に逆う気　**水客**
メガホンのポリスも歌いたがる労働歌　柳志

兼題「見せ場」　正本水客選

客の方がせりふを知っている見せ場　日満
愛情の見せ場ドラマにくすぐられ　芳子
近松の見せ場結局心中させ　磯山
二度三度テレビで写す好一番　正朗
見せ場とは知らぬ園児のままならず　野迷路
仲裁をかって男を見せるボス　祥月
舞台裏見せ場が近い釘を打ち　静歩
男には男の見せ場ヘルメット　昭三
入念なセリフ見せ場を意識させ　公輔
フイナーレライト照らせるだけ照らし　昭三
肝心な見せ場相役かぜをひき　春日
水芸の見せ場拍手の虹となる　静歩
ことという見せ場卜書で朱を入れる　滋雀
六方踏む手足に照明ついてゆき　鶴声
三之助見せ場へ競う勧進帳　奈良子
国賓へヒロシマも見せ奈良も見せ　柳志
羽根ひらく孔雀見せ場と思ってず　吸江
八百長のここが見せ場のつかみ合い　生々庵
先代の噂へ見せ場やりにくし　小松園
こんなとこから伏線張っている見せ場　古方
もう一度スロービデオで出す見せ場　文秋
総会屋の見せ場をそらす袖の下　吸江
なかなかに見せ場とならぬストリップ　栞
ドサ回り見せ場へ白粉やけ淋し　六竜子
見せ場めく女の嘘を聞く別れ　遊仙
サーカスは見せ場にちょっと幕を上げ　静馬
頬かむりその瞬間の与三郎　宣介
ウェッディングケーキ見せ場はナイフに手を重ね　生々庵
最後の見せば鐘がなり虫が鳴き　栞
映倫でハサミ入れられて来た見せ場　庸佑
月はふたりへしずかに舞台暗転す　宣介
男の見せ場一分では帰えれめえ　生々庵
オーバーな見せ場に出てる芸の底　弓彦
見せ場だと言うに招待もう帰り　摩天郎
腕前は見せ場きっちり見せてくれ　古方
ドサ回り見せ場は昔のままで見せ　与呂志
悪人がみんな切られて済む見せ場　文秋
フイナーレ有像無像をみな並べ　芙巳代
ここで拍手原稿に朱がはいり　柳宏子
鐘一ツ見せ場をつくる音で鳴り　言也
ピエロピエロになりきっている見せ場　栞
道行の見せ場はアイと返事する　水客
花道へきた人生の顔を持つ

★

六月号発表の「素足」訂正。
〃試歩三日〃は武助〃勲七等〃は春白

利久は利休が正しい

冨士野鞍馬

拙稿「川柳戦国志」の愛読者が多いのに感謝している。ところが六月号の千利久について、山路閑古先生から懇篤なご注意を賜わった。

「川柳塔に御掲載の貴文川柳戦国史は毎号面白く拝見しています。六月号の千利休を千利久とお書きになったのは、明らかに間違いですが、利久という文字も世間には可成り用いられています。何処からこの間違いが始まっているかを目下研究中ですが、理研酒の「利久」が一番有力な誤字の根拠のようです。理研で合成酒の銘柄を考えた時に大嶽八郎博士の母堂が千利休がよかろうとて、リキュールを摸しての利休の銘柄を提案され、それを鈴木梅太郎博士が採用され、利休では故人に礼を失するから字を改めて利久にしようといわれたそうです。鈴木博士の深謀遠慮が仇になって、利休まで利久と書かれるようになったようです。

（小生も利久と書いて叱られたことがあります。御心配なく）

という御翰である。念のため「柳多留」を調べてみると、三十一編は利休になっているが他の一一五、一四二、一五三編は利久になっている。そんなことでうっかり利久と書いてしまった。

写真は南大阪、玉造川柳会合同吟行に参加した（左から）岩本雀踊子、西辻竹青、上田翠光、白柳、宇宙太、小松園諸氏。奈良室生寺から大野寺句会、出席30名。（フォト・柳宏子）

★川柳の目の適確さ

馬場博治

—不二田一三夫宛—

前略—川柳塔を社会部員にも読ませ、川柳の〃目〃の適確さを勉強するようにいっております。

悪酔いヘルンペン向きを変えて寝る（大萬川柳五月号発表、弓彦）

動きとユーモアをみごとに一体化したこうした表現を、われわれはみな学ばねばならぬと思っています。

日曜版に書いた川柳の記事では、五十通近い手紙や葉書が寄せられ、そのほとんどが川柳を愛する人たちからの感謝の手紙で、書いた私としては本当にうれしく思いました。

今後ともご精進のほどを、お祈りしております。（朝日新聞「日本の年輪・川柳」の筆者で、現在朝日新聞福岡総局次長）

川柳塔社常任理事会

六月四日六時から本社で常任理事会が開かれた。

「路郎忌」の打ち合わせを前月から引きつづきおこなった。七月七日は参院選挙の投票日なので地方からは時間的にどうか。しかし、山陰方面から出席OKの通知をいただいている方もある。

本年度の二賞選考委員がきまった。「路郎賞」の委員長は生々庵理事長。「川柳塔賞」の委員長は多久志、好郎両副理事長の合議。

出席—好郎・白柳・柳宏子・水客・生々庵形水・多久志・文秋・小松園・一三夫諸氏

タチカワペン
TACHIKAWA
優雅な書き味

名地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会

金井文秋報

スマートにひょろひょろ咲いたママ。庭　静馬
奥さんと呼ばれ学籍まだある身　滋雀
行末は地獄と決めて強くなり　形水
数学は苦手でんねと悪びれず　柳宏子
ドライヤーこの二三本に逆らわれ　弓彦
大学を出しとき父母はまだ案じ　舟
ドライヤーをかけ角材も振り回し　文一
大臣になれよと孫のおむつ替え　秋
二次会は苦手を抜いてはずみ出し　吸江
ドライヤー心は彼氏と逢うており　千梢
太陽を拝む理窟を考えず　好郎
仇花の実らぬ命摘み取られ　古方
強烈な太陽ビキニ呼んでいる　金三
太陽に輝く校旗にうれし泣き　君子
行末を保険屋心配してくれる　生長
植木市咲いた草花売りあせり　喜風
甘いもの苦手の大工遠くかけ　双楽
女故にドライヤーの熱さこらえる　白柳
奥さんと言われて似合うようになり　智子
奥さんに泣きゃだんながうんと云い　肖二
ドライヤー男のおしゃれ第一課　県吉郎
行末は流れる雲に似た二人　綾女
浮きうきとデートの前のドライヤー　誓二
鉢植は買うた年だけ花が咲き　頂留子
ドライヤー髪まで女に近くなる　章雅
うすい毛へドライヤーいるかとひやかされ　庸佑

玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

春の宵アンマが杖を置き忘れ　一舟
畳屋は針を斜めにさして昼　肖二
傾いた柱へ建具折れ合わず　文秋
度のすぎた自由が産んだ全学連　双楽
全学連ちっとは教育された人もいて　古方
仕送りへ全学連を知らぬ母　金三
恢復のきざし一輪贈る恋　照一
幼稚園もうチンピラになるきざし　柳志
大器晩成きざしはとんと現わさず　恒明
ここにいたよと浜木綿のつややかさ　千歩
四月馬鹿酒の肴に酔うてはる　千梢
四月馬鹿もしやの欲でのせられる　誓二
合格のゆとりが言わず四月馬鹿　滋雀
風船も祭りのリズムに乗ってゆれ　貞山
手も足もリズムに乗せた安木節　井平
リズムに乗った殺陣と云う踊り　大庸
母となるリズム楽しくミシン踏む　鬼遊
オシメしたお尻をリズムにあわせる　弓彦
水道の洩りもリズムと思う恋　白柳
リズムに合うたもいる園児の輪　静馬
手拍子のリズムに乗って歩き初め　章雅
無理云うてもろうた嫁にある不足　あいき
無理からぬ話を母も共に泣き　六竜子
無理せんと休みなさいなと靴そろえ　智子
子の無理に親の道理はへこまされ　君子
教育ママの目には無理とは思うてず　柳宏子
双方が無理と知ってる話合い　凡九郎
ぼんぼんの無理を世間は受付けず　清子

むらくも歓桜句会

藤井明朗報

寝化粧の辯美しく女老け　水客
酔いざめの水良心につきあたり　緑之助
良心が恥じますと妻折れず　明朗
友送る夜汽車に名残惜しい月　祥月
良心が一直線に届けさせ　独仙
長寿村明治のにおい濃ゆきとこ　孤呂二
三代目明治の気骨受け継がず　晃男
ベツベツに動く良心の顔でいる　新雪
停年へ明治職場をさようなら　正朗
日本海の怒とう明治の音をたて　清泉
明治百年戦争だけはお断り　勇
良心に磨きをかけていい姿勢　白汀
も め事も明治生れの顔ですみ　比年
かくすだけかくす内幕すきま風　孝華
夜桜へ袷かきあわす春の風　加代
何気ない言葉に良心くすぐられ　芳子
ピカドンで明治はさらに遠くなり　美栄
そんな銭あったか明治の低物価　文子
ベトナムへ世界の良心呼びもどし　清夢
良心が許さず便乗さし控え　軒太楼
捨てて勝つことも明治の処世訓　紫
停年制明治生れは影を消し　英子
晴れやかな衣装にあった化粧する　智子
良心がとがめる小さな今日のうそ　きみえ
漬物のうまさ明治のコツでつけ　緑花
良心にどんぞこ暮しみつめられ　礎山
じっと見る眼に良心まだ残り　節枝
良心を一寸ごまかす色眼鏡　華宝
職場にも明治が一人しかおらず　弘朗
乗り切った明治の祖父の根性　清流
献血へ良心らしい顔が来る　茂人
良心に問えば貧しさ苦にならず　一郎
これぼちの酒へ良心投げ捨てる　健太郎
人間国宝まだまだ明治花盛り　酔歩

富柳会（富田林市）　阿部柳太報

こそどろの仏心に足がつき　美代
仏心釣った魚の眼に打たれ　東雲楼
仏心を当てに本山屋根を葺き　摩天郎
仏心に遠い同士が淀で逢い　きはち
罹災地に仏心の品あふれ　凡吉
兄弟の父が違うと知らなんだ　紅月
足して二で割ればと思う兄弟　花梢
すらすらと仏心が言わさない　笑痴
坊さんが来て命日をあわてだし　千万子
十円で後世を頼む寺参り　吉太郎
仏心もお年令のせいにされて居り　百水
仏心を出して集金渉らず　静馬
山門をくぐればスリも手を控え　柳志
人生に一服と言う療養所　六竜子
禁煙の身に一服はあめを買い　遊仙
ベトナムのつかれ沖縄で息を入れ　天笑
モーニングうっかり裏章出すところ　太路
うっかりとほんまもんだいかいダイヤ　柳太
税務署でうっかり云うたのが落度　白柳

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

思春期のある日突然だまり込み　史好
突然に聞かれほんとの年が出ず　奈々
突然のおだぶつ交通事故かいな　大庸
春の雨墨でもすってみよかいな　白扇
お祝と書くだけの墨正座する　鬼遊
失業の夫へ墨をすってやり　静波
突然の告白女目で笑い　秋水
ある日突然蒸発したくなり　雄峯
突然の受賞にとちるインタビュー　吸江
墨汁の津波引き出しの裏にまで　草春
突然の盲腸手術に泡を食い　県吉郎
突然に食費を出した居候　水舟
好きだよと不意に云われて声つまり　万竿
突然の問いは倖せ躊躇する　茂男
職習い突然主家を辞めて去に　喜風
手不足に突然片腕引抜かれ　生長
接吻のムード突然消した犬　重夫
下心あるのか突然来ては世辞　真砂
墨をする一日の長兄にあり　薫風
共稼ぎ突然の母締め出され　白柳
容疑者の一人にされているなまり　好郎

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

尋問にぼちぼち話し出す家出の娘　良行
せかせかとぼちぼちで夫婦仲がよし　凡太郎
ぼちぼちと払うしりから月賦ふえ　良章
鍵たのみ隣は気楽な日曜日　正弘
大学の裏口金の鍵で開き　酔々
お隣の鍵でも開いて不安がり　桂馬
やせ我慢ぼちぼち腹の虫が泣き　一光
病み慣れてぼちぼち家計に異状あり　一治
女房までぼちぼちスカート短かくし　一峯
佐藤さんぼちぼちここらで辞めてんか　吐来
裏表出世欲がそうさせるいとし　浅野
新家庭やっとつかんだ鍵うれし　九山
鈴の鳴る鍵が気になる女ひとり　十駄
先に出て待つ夫想いつ鍵かける　一峰
共稼の倖せの鍵母と住む　輝楽
鍵かけたあとで気になるガスコック　
ぼちぼちと心乱れる春の空　守
ぼちぼちと我が子にも春か入学式　啓三
ぼちぼちと我が人生の裏表　浜坂
郵税が惜しくはないが裏表　八郎
ぼちぼちと退社時間ですデートです　夕子
人の世の裏と表を継ぎ合せ　いわを
貸す時はボチボチでええというてくれ　好郎

あすなろ川柳会（大阪市）　川村好郎報

せきばらいして失言に気づかせる　青香
ほろ酔いを待ってる女房の下心　弓彦
いちばんにならんで買うたとて切手　素郎
その時は咳払いすると決めておき　百酒
いざという時の心臓借りに来る　ゆきを
ハンカチを用意に女泣くつもり　慶之助
ハンカチを膝におく程料理出ず　好郎

川柳ささやま句会　小畠無聖報

割当の太陽があたる団地窓　古仙
一回の気転出世の糸口に　生郎
あけすけに言う仲人でぶちこわし　ひろし
二日酔い後の割当来て醒める　暁光
割当をだまってこなす腕をもち　愉多可
逢いびきへ月も気転の雲がくれ　猪村
あけすけに言うて真実認めさせ　茂広
駅までの気転空しく雨は止み　村雨
あけすけに言いたい性で出世せず　初音
割勘を知らずのめのめ歌い出し　実世
仲人も暫し気転の座をはずし　枝葉
ああそうか気転俄かに用を足し　案山子
ききすぎる女の気転危ながり　をさむ
新婚が割当通り飯を炊き　たつお
割当に難航遂に鶏が鳴き　一筆
匿名で出すあけすけな体験記　ゆきお
あけすけに言えば大臣くびが飛び　一声
空っぽのたんすへ空巣かんしんし　可住
電算機気転利かねが玉にきず　みのる
ほんのりと酔えば気転の利く襖　無聖

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

半生の苦労が実る子沢山　浪子
苦労した父は黙って酒を飲み　伊津志
苦労して故郷に住まぬ子に育て　たかし
買うてまでせよの苦労がふにおちず　松風

妻の座を守る苦労の朝を起き　文子
新築の木の香苦労をかみしめる　美知
ウナ電で送金したが来ぬ返事　窓花
ハイという返事が甘いハネムーン　寛子
三回目やっと返事の筆不精　勝子
代筆の返事と知らず封を切り　さだ子
角のある返事中二の反抗期　一歩
一生をかけた頼みへ待つ返事　若子
お返事のよい子になって来た園児　斐山
カチューシヤのように別れた雪の駅　竹荘
叱る父叱らぬ父になって老い　一人
よせ書の一人一人にある記憶　桂緑
二十才とはいいな男性化粧品　夢迎
座らすに惜しいミニの脚線美　梅林

備前川柳社　目賀芳月報

解釈のしようで法に血が通い　飴ン坊
はっきりと言えば少々法にふれ　正州
はからずも六法全書に用が出来　芳月
法律を作った人も罰せられ　楽天
メンデルの法則娘がまた生まれ　柳子
法律が強い女にしてしまい　浄美
法にないこだとと軽くあしらわれ　一声
法律を覚えて渡る世が丸し　胡風
法律は知らぬがほこりは出ぬ体　博友
出生の瞬間法が身を囲み　柳五郎
悪法ということにしてさわぎ立て　水仙
法の裏あって汚職でよく太り　幸仙
犯罪が増えて法律また変り　伊久野
覚悟して法のさばきを待つ手錠　久米雄
吉日の顔生々と帯をしめ　森山健太郎報

いずも川柳会

観光地本家元祖が向かい合い　緑之助
孫真似る注射へ患者になってやり　独仙
高姿勢読みの甘さをまた突かれ　代仕男
失言をテープレコーダがまた聞かせ　河南
野にくだる覚悟失言とは云わず　紫
失言の妻を叱れば切り返し　京斗
思い切り甘えてみたい春の月　壮
失言をするまで記者は話しかけ　草丘
欺められたワナと失言気がつかず　軒太楼
肥えて来た娘うっかり褒めちまい　晃男
失言も末座問題とはされず　澄水
育児法甘やかさずにほっておけ　巡歩
甘言を柳に風と受け流し　富喜子
流れ雲甘い慕情が故郷に向き　千代
甘いからやっぱりパパの方へ逃げ　李朋
そのうちに尻に敷かれる甘い仲　一灯
子の躾け甘く育てて後で泣き　万栄
誘導に乗って失言してしまい　正朗
甘いもの僕も好きです恋愛中　芳子
良縁を失言が祟り断わられ　湖楽
父ちゃんが甘いからよとなじられる　泥子
どう真似てみても姑の味が出ず　健太郎

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

マイカーを乗り捨て山へ戯れる　暁年
マイカーが出て井戸端の話派手　草春
マイカーのまだハンドルに自信なく　圭水
青空の駐車マイカーに悩みあり　貴山
セールスも先ずマイカーを乗りこなし　宏子
マイカーで女の城は射落せず　金三
洋裁の腕が達者で嫁きおくれ　専夢
団体にアベック道を避けて行き　智也
グループの子供よく喰べよくしゃべり　孝夫
グループに掴まりあんじょう騙らされ　亜成
アルサロのマッチ話の間をつなぎ　有一
仏壇のマッチ祖先の灯をともし　功
グループで来ると大きな声が出る　常夢
スカートが徹夜で子供の服となり　一扇
グループの活気出しゃばり役に立ち　形水

オーエスケー川柳会　大坂形水報

チンドン屋グループサウンズ真似ている　守安
不景気にサービスマッチすがた消し　小園
日の本はGSならでは明けぬ国　流石
宴会はグループ毎の声になり　青谷
遊ぶにも衆をたのみの現代っ子　貞彦

ウイロー社（ハワイ）　若本多久志選

鏡ではまんざらでない相に見え　万里歩
人相も悪く油断も出来ぬ人　内海
人相のよい候補者へ婦人票　柳葉
悪役をふり当てられた俺の顔　紅葉
就職へよい人相が役に立ち　紅渓
人格も教養もある相に見え　浮草
人相を見極めてから採用し　エス女
人相はよくて油断のならぬ人　あき坊
人相をそっと覗いて居留守きめ　カロ女
蔭のある生活人相も悪くなり　快夢起
人相は兎も角金は溜めており　魔花麗
弱り目に祟り目人相まで変り　暁舟
円満な相だが金は出し渋り　拝山
人相観に酒と女を注意され　蒼蛇楼
食うだけにや困らぬ相と易者言い　泉水
零落にどこか貴賓の相があり　峯円
俺の人相隣の犬に侮られ

川柳たけはら（竹原市）　山内静水報

父ちゃんと花見に行くのも久しぶり　清子
新しいふすまへめだつかべのしみ　洋子
砂浜で兄と言う字が打ち消され　康宏
合格を二一度新聞で確かめる　日出夫
手紙だす相手を母さん知りたがり　紀美子

値上げにも反対しろよ全学連　勝彦
もう一人の私が私を笑ってる　浄美
アルバイトとれも勉強のつもりです　経子
実弾に弱い自衛官でした　孚彦
以上学生

怒るだけ怒って食べてよく寝る娘　延子
音もなく洗濯物へ春の雨　よし恵
切るものかもつれた糸へ張った意地　操子
親父より僕が上手と花ばさみ　こふみ
いいかげん帰ってほしい客が酔い　一枝
恙なし停年までを今日もまた　澄
真剣なまなざしミカンむいている　笑子
嫉妬したとたんに愛を見透かされ　そのみ
闘争続く青春に平和が有る　康徳
旅なれて時間上手に浪費する　草人
よけて待つ晴着埃りをあびせられ　松風
金魚屋の声張り上げてもう彼岸　雅鳳
子を疵う嘘を笑って聞いてあげ　扇水
集団で動くメダカの日だまりか　文晴
プロ入りが駄目なそばや屋希望の児　英詩
桃色の便箋甘い声を秘め　清海
そんな事わかっていますわかります　静波
花便り足の不自由な人に聞く　峯泉
満たされぬものには妻の老を見て　清太郎
期待していただけガッカリした返事　真好
つり銭へぬくみを残す子の使い　鬼焼
定職が有るからオデンの味がよし　菁居
人見知りする娘家では女王様　笹舟
たやすく死を言う老のうすき眉　春昇
気の弱い僕にも胸毛が生えて来た　蘭幸
冗談が言えぬ相手で肩がこり　不動
下駄ばきで気軽に行くも町のバー　芳則
グランド一周矢張り年令だなと思う　一路
趣味はよし私をこんなに張り切らせ　大陸
春うらら妻ご無沙汰を詫びて発ち　泉

プロレスの血素晴らしいショーと化し　静火
まっすぐに帰れば妻のはしり書き　のり子
スイッチで活気あふれる始業ベル　凡女
口少しあけて悲しいポーズです　政己
四面楚歌五目ならべに子を誘い　不朽
理智的な瞳つめたいとも云われ　房子
留守中の苦労貴男を見て忘れ　静水
猫の目が変り安静ほど遠し　天石庵
伸びる春たのしバラの芽菖蒲の芽　紫苑荘

ふじかげ短詩睦会

藤本礎山報

一流がずらりと皆勝つ顔で立ち　二朗
一流紙広告スペースばかりふえ　由起子
発行部数さすがと思う一流紙　香絵
直感の鏡鋭さ一流だけの記者　キクコ
一流紙ベストセラーを尚あおり　敬子
一流を護りスリーランホーマ打ち　勲
一流のスキーヤーカメラに追われる日　梅野
一流紙スクープさすが真をつき　きち
一流の横綱王座揺れはじめ　民子
一流校五、二倍を引き寄せる　保夫
一流が作った籠でも水はもれ　恵子
下請の倒産一流気にもせず　佐知子
一流が白紙を染めた値の出よう　和宏

ここまで小中学生

一流の料亭いそがしすだれ越し　英子
無条件降伏させる一流品　貴子
一流になりたい歌会今日も済み　冨子
一流のいのちある句が創り度い　多鶴子
常にある事を一流トップにし　照夫
一流を目差しアルプス登頂する　大治郎
一流になった努力を認められ　武志
一流が揃う競技へ胸を張り　昭夫
一流のスター夫と別れさせ　千重
一流の役者は涙まで流し　喜美

一流の犬で餌さ代五萬円　一代
全快へ一流の腕ファイト湧く　ノリ子
一流の暮し夢見てわび住い　明
復職へ一流の腕見せどころ　長男
一流の落目にマスコミもう寄らず　透風
一流を目ざしたばかりに浪人し　阿也女
一流と言われ苦労は免がれず　章代
只でものやるさえ一流二流あり　加代
一流と予断許せぬ品が出る　利子
一流の暮しをどうして保つ寡婦　十三子
一流の掃除機買って部屋二つ　喜久
一流のキャリアが復職させている　佳
一流になれば落着く腰と知り　吉春
夢えがく一流あまりに岐し過ぎ　忠志
一流のキャリア生かして粘り抜き　鎮也
ふぐ料理一流と云う腕を食い　和久
一流になればなったである苦労　征山
一流になっても要心おこたらず　礎山

高級洋菓子
アトラス
堺市役所前　TEL(2)2334

社告

川柳塔の優秀句へ「路郎賞」
近作柳樽の優秀句へ「川柳塔賞」

「路郎賞」の選考委員は前回とおなじように中島生々庵、北川春巣、西尾栞、菊沢小松園、、清水白柳諸氏。「川柳塔賞」の選考委員は、市場没食子、橘高薫風、戸田古方、正本水客、川村好郎、若本多久志諸氏。昨年十月号から本年九月号発表の川柳塔同人作品と、近作柳樽の作品から各選考委員がベスト一〇をえらんで持ち寄り、その栄光の一句を九月四日の常任理事会で決定、十月号で発表。「路郎賞」に楯と賞状「川柳塔賞」にも楯と賞状。なお句と雅号を記念品にきざんで贈呈。（川柳塔賞は本社同人以外の作品に限る）

川柳塔社

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　若本多久志選

課題吟（各題5句以内）

「ラッシュ」　村上旭童選
「少女」　菱田満秋選
「皿」　青木遊星選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　西尾栞選

課題吟（各題5句以内）

「プラン」　舟木与根一選
「子連れ」　中川晃男選
「役付き」　小畑自有浪選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳筥をご使用ください。

定価　百四十円（送料六円）
半年分　八百七十円（送料共）
一年分　千六百八十円（送料負担）
昭和四十三年六月二十五日印刷
昭和四十三年七月一日発行
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

Toray
東レ テトロン®
レインコート
EASY CARE／手のかからないせんい
東洋レーヨン株式会社

・2DK・

★参議員選挙の投票日と路郎忌がカチ合った。

★故路郎先生の思い出を、三条東洋樹氏と西村梨里さんに書いていただいた。

★相変らずのスペース・マヒで好読み物がまた次号へ回わった。申しわけない。

★自選百句は、毎号ほとんど残本なしという好評である。作家にもファンがあって、一人で二十部以上買ってくださったのが数氏あった。しかし一応次号の春集、栞両雑詠選者でおわることにする。

★活字で見れば、ハハンこの句に似たのが過去にもあったと、スグ思い出せるのに、さて暗誦ということになると、自分の句でさえ十句がおぼつかない。こんなのを暗誦音痴というのだろうが、二十枚近い台本を二三度読めば暗誦できる漫才さんもいる。

（不二田一三夫）

涼風のかなた
高野山
特急「新こうや」号　毎日2往復
なんば ①9時00分発　②14時00分発
座席指定券1週間前から発売…170円
全車完全冷房完備スナックバーつき
――宿泊クーポン発売中――
《1泊2食と往復運賃つき》2,000円
お問合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038
(779) 8661 (632) 0188
南海電車

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十三年六月二十五日　印刷
昭和四十三年七月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　七月号

定価　百四十円（送料六円）

気品あふれる
シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。
その秘密は、東レテトロン®一激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。

東レ テトロン（ポリエステル 100%）
オルテロン
スーツ・スラックス
Toray 東洋レーヨン株式会社

料理も電話も 551 ここがいちばん
TEL（641）551-2

広東料理・焼餃子
豚饅 蓬莱 焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー